

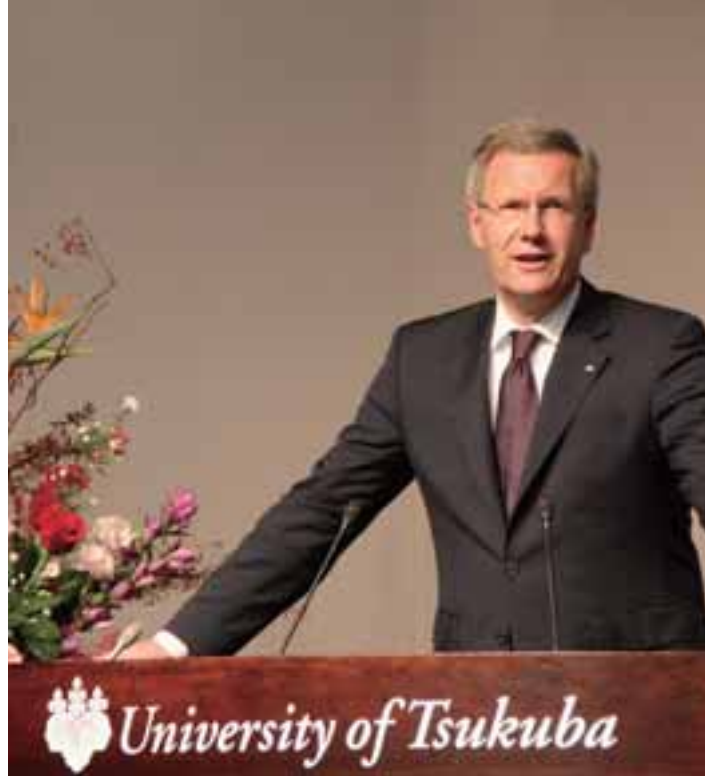
Tsukuba

COMMUNICATIONS *Winter*

対×談

科学と社会をつなぐために 我々は何をすべきか

日本科学未来館 館長 毛利 衛 氏 × 前筑波大学 副学長・理事 森本 浩一 氏



- 8 特集 教員免許状更新講習推進室
- 10 聴 八木 勇治 准教授
- 12 学内組織紹介 菅平原実験センター
- 14 名物先生登場 高見 節子 教諭(附属視覚特別支援学校)
- 16 Sports Club 弓道部
- 18 Art & Culture 舞踏研究会
- 20 TOPICS イベント/地域貢献/受賞
- 26 OB&OG 青木 俊直さん
- 28 リレーエッセイ
- 30 つくばNOW
- 31 つくばSupporters
- 34 新聞掲載・テレビ放送一覧
- 35 イベントカレンダー



科学と社会をつなぐために 我々は何をすべきか

日本科学未来館 館長

前筑波大学 副学長・理事

毛利 衛 氏 × 森本 浩一 氏

日本科学未来館館長就任は 社会への恩返し

森本:日本人で初めてスペースシャトルへ搭乗した宇宙飛行士として、大変有名な毛利館長は、2度目の宇宙飛行の後、2000年から日本科学未来館の館長になりました。先ほど拝見させていただきました、未来館のシンボル展示「Geo-Cosmos」*は、「宇宙から見た輝く地球の姿を多くの人と共有したい」という毛利館長の思いから生まれたそうですね。

毛利:はい。画面上を流れる雲の映像は、気象衛星が撮影した画像データを取り込んで反映させたもので、リアルな地球の姿を眺めることができます。ノーベル賞受賞者の白川英樹筑波大学名誉教授が第一人者として開発されている有機ELパネルを使った、世界初の地球ディスプレイなんです。筑波大学と未来館のつながりを感じます。

森本:LEDに続く次世代の発光デバイスといわれる有機ELパネルの地球ディスプレイとは、さすが未来館ですね。素晴らしい「Geo-Cosmos」をはじめ、未来館には、毛利館長のたくさんの思いが詰まっているように感じます。どのようなお考えで、館長に就任されたのですか。

毛利:簡単に言うと、恩返しなんです。自分は、子どもの頃からの「宇宙に行きたい」という夢を、税金で叶えてもらいました。日本の国が、税金で、個人の夢を叶えるなんてありえない話ですよ。しかし、結果として、科学者として宇宙に行くことができ、子どもの頃からの単純な夢だけでなく、研究者としての夢も一緒に実現させていただきました。2回目の宇宙飛行は52歳だったんですが、もう50歳以上にもなると、「日本の人たちからの税金を使って自分の夢が実現したので、これ以上のポジションとかはいらない。これからは、社会に恩返ししていきたい…自分は科学者なので、科学を

通して社会に還元したい」という思いが強くなりました。宇宙飛行が終わって帰国していた時に、未来館の計画と初代館長のお誘いがあり、「これこそ自分がやるべきことだ」とお引き受けしたのです。

森本:未来館はどのようなコンセプトで計画されたのでしょうか。

毛利:国は、多くの国家予算を研究開発に投資しており、そのために総合科学技術会議があって、国全体としての基本計画を作り、どういう方面に、どれだけのお金を投資して成果を生み出すかを検討します。ちょうど、未来館ができた時は、第2期科学技術基本計画がスタートする時でした。国としては、科学技術の成果を多くの国民に伝え、何のために先端科学を探求するのかを理解してもらうため、そういう場を作るというのが最初の発想でした。私が館長を引き受けた時には、今までのように、国が上から目線で啓発するというか、こういう成果があったとか、こういう芽がある、と





知らせるような押しつけでなくて、研究者自らが、「なぜ自分はこの研究をしているか」ということをストレートに伝える、研究者の顔が見える科学館にしたいな、という思いがありました。単なる箱物ではなく、その中に人が介在して、社会の一員として、科学者、研究者としての役割を果たし、それが生きがいになっているということ、素直に伝えることが大事だと考えたのです。それと同時に、そういうことを通して、「将来、社会を科学技術でこんなふうに変えたい」という思いを具体的に見えるようにするの、未来館の役割だと思いました。

森本: 開館してちょうど10年目ですが、変わってきていることはありますか？

毛利: 今、ちょうど10年目で、第4期基本計画も始まったところです。今までは、先端科学を国民のみなさんに理解していただく、という面が多かったのですが、それだけではすまない時代に入ってきています。この10年で、ヒトゲノムが解読されたり、スーパー

コンピューターで気候変動や地球温暖化のシミュレーションができるようになり、自然や社会の限界が明らかになってきたからです。さらには、インターネットに代表される情報ツールが発達し、世界中が同じ情報を得て、ダイナミックに同時進行するようになってきました。このように社会がガラッと変わった中、さまざまな地球規模の課題をどのように克服していくかという上で、科学技術は、すごく大きな役割を果たすようになってきています。政治、芸術、教育、スポーツ…文部科学省やその他の省庁がやっていること全てを俯瞰して、どう科学技術が貢献していけるかということを検討する必要があります。「科学技術が一部の人のだけのものではなく、文化の1つとして、未来に貢献するためのものですよ」という理解を醸成していくことが、今、未来館にとっては最も大事な役割だと思います。大学の役割も、同じように変わってきていると思うのですが…。



出典：JAXA/NASA

01

森本:変わってきていますね。大学には、教育と、研究と、社会貢献という3つの柱があります。教育というのは、学生に対して教員が教えて未来を担う人材を育成するというのですが、教え方にしても、今までのように、知識を伝えるということよりも、どうやって基本的な考え方を身につけさせるか、あるいは、プレゼンテーションやディスカッションのやり方を身につけさせるか、という指導に少しずつ変わってきております。

毛利:おっしゃった大学の3つの柱の中で、これからの時代は、広い意味での社会貢献がより重要になり、そのために、教育や研究が必要だということになると思うのです。レアメタルの問題、エネルギーの問題、東日本大震災の問題…今、日本社会も含め、世界が、持続していけるかどうか、ぎりぎりの瀬戸際にいます。私たち未来館も同じですが、人類が生き延びるために、どう社会貢献できるかということが、最終的な目標になるのではないのでしょうか。

森本:そうですね。自分の興味に基づいて研究をするだけだと、社会から乖離してしまう可能性がありますね。最終的に、社会で活躍できる人材を輩出することが大学の役割ですし、知識基盤社会をどうやって構築していくかを積極的に提案していく必要があると考えています。さらに、震災後には、大学に重要な役割が期待されています。被災した東北地方や茨城県の市町村と、震災復興・再生に向けた連携・協力協定を締結し、大学として、さまざまな形で支援活動を展開しています。例えば、放射線の問題で不安に思っておられる方に、この数値なら大丈夫と説明したり、あるいは、この点に気を付ける必要がある、というようなことをアドバイスしたりしています。他にも、防災対策や新しい街づくりのコンセプトを提案するなど、「知の拠点」である大学としてできることはたくさんあります。「復興・再生支援ネットワーク」を立ち上げて、これらの活動を全学的に支援する体制を整えたところです。

毛利:震災などで困っている人に、大学として具体的な貢献をすることも大切ですが、同時に、社会の人が、科学を文化的な素養の1つとして捉えて、将来に起こる

さまざまな問題に対して、自分で判断して行動できるように働きかけていくということも重要だと思います。というのは、大震災の時に、研究者、政府、メディアが、いろんな情報を中途半端に流して、普通の社会生活を送っている人たちが、自分の判断ができない状態でしたよね。それを目の当たりにして、未来館は、今ある日常の問題に対してどのようにお手伝いできるかということと、将来の大きな問題に対して、一人ひとりが自分の立ち位置を客観的に理解し、正しい判断や行動をできるようにする、という両方が必要だと考えたわけです。大学も同じですね。大学に限らず、政府も、メディアも、今、このような新しい認識に立てる時ではないかと思います。

森本:その通りですね。

科学コミュニケーターの重要性

毛利:未来館は、そういう社会と科学技術との関わりを上手く伝えることができる、人材育成の場としても活用しています。未来館には、科学コミュニケーターの職員が、現在50人ほどいますが、科学コミュニケーションの重要性ということを文部科学省も理解しており、第4期基本計画の中で、人材育成に力を入れることになっています。科学コミュニケーターは、研究者の身になって、一般の人たちに科学の知識を伝えると同時に、社会からの要望を研究者に伝えることを目指して養成しています。研究の経験がある人を中心に採用して3年から5年間、科学コミュニケーターとして未来館で活躍してもらった後、社会のいろんな分野に進んでいただくという仕組みです。研究所の広報関係や科学館、特に最近では、大学の博物館なども増えていますし、理系企業のCSR(企業の社会的責任)部門でも必要とされてきています。今まで、CSR部門は広報の人たちの担当でしたが、広報の人たちですと、自社が作っている製品の先端技術の原理まで含めてはうまく伝えられないのです。そこで、「自然との関わり、地球との関わりがこうなっているから、自分の企業のこの製品は優れているのですよ」といったことを言える人が求められているわけです。



日本ばかりでなく、世界でそういう人たちがこれから必要になってきます。

森本:科学コミュニケーターの存在は、コミュニケーションのプロとして、難しい事柄をわかりやすく翻訳するとともに、そのノウハウなり経験を、一般の研究者の方にも広げて、みんなが意識改革をして、スキルを少しでも身につけられるようにするなど、科学と社会との間の距離を縮めていく役割を担うと思います。本学でも、大学院において、未来館のご協力を得て、科学コミュニケーターの養成講座を開講しています。

毛利:大学で、科学コミュニケーションを身につける上で、学生や研究者は一般社会の現場にいません。キャンパス内にいるわけですからね。その点、未来館は、来館者の誰に対しても対応する場所です。しかし、我々には、大学のように、科学コミュニケーションの意味や、芸術との関係を体系化するという学問的観点はありません。私たちも、現場ばかりじゃなくて、体系化していくにはどうしたらいいかということを考えなければならぬ時代になりました。そういうところで、大学と未来館が連携して、お互いの



欠けている部分を補い合うことができれば、大きな成果が上がるのではないのでしょうか。筑波大学でも、科学コミュニケーションを重視して行こうとされているようですので、お互いに協力のチャンスだと思います。

森本:それは、本当にありがたいお話です。我々も、頭の中で抽象的に考えているだけではなく、現場で実践した時にどういう反応が返ってくるかを数量的に分析したり、いろいろなアプローチで表現の仕方を工夫してみたりと試行錯誤していく中から、新しい知見を見出ししていきたいと思っています。

優等生という枠から 解放できる指導者を

毛利:ところで、先ほど、筑波大学として、被災地支援をしていると伺いましたが、私たちも、震災以降、インターネットやアウトリーチ活動を通じてさまざまな試みをしています。科学コミュニケーションの中で何ができるかということを実験してみました。そんな中で、この夏、非常にユニークで、学生の教育にもすぐ役立つのではないかと

という経験をしました。

森本:それは興味深いですね。

毛利:未来館とパートナーシップを結んでいる、進んだ環境経営で知られる株式会社リコーと一緒に被災地支援を、岩手県陸前高田市で行っています。地元の高校生をターゲットに「学生復興会議」というプログラムを実施しました。彼らは、自らが家族や家を失う被害を受けて、自分の人生を「これからどうなっていくのだろう」と、痛みを伴って考えていました。未来館として、何かお手伝いできないかなと思ひ、実際に被災地を訪れ、学校や市役所へ出向いた中で、「何も無くなった陸前高田の街の10年後、20年後を、すべて誰かにまかせて復興してもらうのではなく、自分たちが住む新しい街を作っていくのだ」という主体性を持たせる」ということを主としたプログラムを開発しました。市長も、家族を亡くされて本当に辛い最中に、私達の提案に期待して引き受けていただきました。当日は、39人の高校2、3年生を6、7人のグループに分け、それぞれのグループに、未来館の科学コミュニケーターが、ファシリ

テーター*として加わって、丸一日かけて「陸前高田の象徴として誇れ、また地元の人や訪れた人の間に交流が生まれるシンボル施設」を議題にして徹底的に話し合い、形に見えるようにしていきました。形にしたのは、ラフスケッチを描いてくださった地元岩手の建築家の方々と、生徒さんの発想をプロの力でどんどん具現化してくださいました。建築家の方々は、このプログラムの話を聞いて、10人ほどボランティアで参加してくださったのです。みんなの想いが深いと、教育効果というのはすごく高まるというのを実感しました。

02



03

【Geo-Cosmos】

日本科学未来館のシンボル展示。1000万画素を超える高解像度で、宇宙空間に輝く地球の姿をリアルに映し出す。有機EL（96^{ミリ}角パネル10362枚）を使った、直径6^{メートル}重さ13^{トナ}の地球ディスプレイ。有機ELディスプレイとは、電気を流すと光る性質をもった有機物質（発光体）を使ったディスプレイのことで、次世代ディスプレイの最有力候補として注目される最先端技術。

【ファシリテーター】

話し合いの場で、話の流れを整理したり、参加者の認識の一致を確認したりして、話し合いを促進する人のこと。未来館で力を入れている科学コミュニケーションの手法の1つ。

森本:陸前高田の高校生は、どんな様子でしたか？

毛利:最初は、周りのことを気にしながら、優等生でしようとするのですが、ファシリテーターが、多様な試みをしてそれを壊し、生徒たちの本心を少しずつ引き出していきます。そうすると生徒たちの目の色が急に変わってくるのです。午前中は、その優等生を壊すのに、かなりの時間を費やしましたが、いったん壊れていくと、発想がすごく豊かになりました。学校の先生たちも、生徒たちの眼の色が変わったことに、びっくりしていましたね。最終的に7時間終わった頃には、グループで話し合っ、建築家の人が描いてくれた絵を使いながら、寸劇を入れたプレゼンテーションまでできるようになったのです。建物を使用したときのイメージを伝える寸劇は、とてもユニークで、市長へのプレゼンテーションも期待以上でした。市長へのプレゼンテーションを約束していたことも、生徒たちの力を引き出したのだと思います。そして、最後には、生徒たちのアイデアを実現する、と市長が約束までしてくれたのです。この時の話し合いこそ、文部科学省が今、熱心に推進している「熟議」の実践版だと思いました。

森本:前文部科学副大臣の鈴木寛議員が提唱された「熟議」ですね…。

毛利:「熟議」は、学校教育の現場で取り上げるとすごく効果的な方法なのですが、生徒たちを、優等生という枠から自由にするのは、そう簡単にいきません。今の、優等生を育てようとする教育システムの中ではとても難しいでしょう。筑波大学は、東京教育大学からの伝統がある優れた先生を養成するところですから、優等生という枠から、学生たちが自由になるように導く指導についての研究を徹底的にやっていただきたいと思います。

森本:わかりました。各分野の先生方が横断的に討議し合うフォーラムのようなものを作ろう、という動きもありますので、ぜひ取り組んでみたいと思います。この「学生復興会議」の取り組みは、他の地域でもやっていく計画はあるのでしょうか。

毛利:今回は、かなり難しい課題を乗り越えて、周到的な準備をして、ようやく実現することができました。それでも、うまくいくとは、限らな

かったのです。でも、そういう困っている状態というのは、地方で、それぞれにあると思うのです。大震災だけじゃなくても、その場所その場所に合わせて、この手法が使えると思うので、それは試みていきたいと思っています。

”伝統”と”環境”を生かした大学づくり

森本: 今、本学の一番の課題は、グローバルな人材をいかに輩出するかです。グローバル化の中で、しっかり二国間、多国間の交渉ができる能力を身に付けた人を一定の規模で輩出していかないと、日本の国際的な存在感が高まらないのではないかと。そういうことを含めて、本学や本学の学生に対して、メッセージをお願いします。

毛利: まず、グローバル人材の育成がなぜ急務なのか、大学の教職員全員がしっかりと認識しているかが重要だと思います。学生は、小、中、高と、カリキュラムに沿って、受動的な姿勢で学習してきたので、「グローバル人材とはこういう人です」と教え込んでも、学んでいかないと思うのです。先ほどの陸前高田の高校生じゃないですけども、自分の中で問題意識を持って始めてグローバルな人になれるのです。グローバルというと、国際的とか、地球全体の、というように思うかもしれませんが、実は、自分の内部にあるのです。そういうことに気が付いた人は、黙っていてもグローバルな人になるのです。あとはテクニックで、英語を覚えたり、コミュニケーションの仕方を覚えたりすればいいだけです。しかし、このようなことを、先生たちから学生に理解させるということは、ものすごく難しいことなので、外部からグローバルな人材を呼び込む必要があるのではないかと思います。筑波大学は、価値観や文化的背景の違う留学生や外国人研究者が多いので、それを最大限に活用するべきでしょう。それこそ、留学生と学生に「熟議」させる。個人同士でも、どんどん議論を戦わせる。そういう雰囲気を持たせると、グローバル人材というのは育つと思います。

森本: 確かに、2000人近くいる留学生や外国人研究者をもっと活用すべきですね。

毛利: 最後に筑波大学に伝えたいことは、ミニ東大を目指すのではなく、オンリーワンの大学を目指してほしいということです。また、師範学校、東京教育大学からの伝統を守り、つくばという特殊な街にあることを活用することですね。

森本: 本学は、体育、芸術の分野を有す国内唯一の国立の総合大学です。現在も、各分野を越え、横断的に教育・研究を実践しており、ユニークな結果も出てきています。例えば、山海先生が中心となって開発した介護用の「ロボットスーツHAL」も、文系、理系、医学、工学という異なる研究分野の融合によって生まれた画期的な研究成果

です。もちろん、教育者を育てるDNAと、いいいますか、教育を重視する伝統は今も続いています。昨年末に、国際戦略総合特区の指定を受けたところですので、これを機会に科学技術の街、筑波研究学園都市の中核として、他の研究機関と連携して、世界のつくばをアピールしていきたいと思っています。

毛利: 私も、つくば市に住んでいるので、筑波大学には馴染みが深く、キャンパスにもよく行きます。この対談をよい機会にして、ぜひ、未来館と筑波大学との連携も進められればうれしいです。よろしくをお願いします。

森本: こちらこそ、よろしくをお願いします。今日は、お時間をいただきまして、ありがとうございました。

Profile



Mamoru Mohri

もうり まもる
毛利 衛 氏

日本科学未来館 館長

- 1948年 北海道生まれ
- 1970年 北海道大学理学部化学科卒業
- 1972年 北海道大学大学院理学系化学専攻修士課程修了
- 1976年 南オーストラリア州立フリンダース大学大学院理学博士号を取得
- 1982年 北海道大学工学部助教授
- 1985年 宇宙開発事業団宇宙飛行士
- 1992年 日本人宇宙飛行士として初めてスペースシャトル・エンデバー号に搭乗
- 2000年 ミッションスペシャリストとして、再びエンデバーに搭乗
日本科学未来館館長に就任
- 2005年 東京工業大学大学院連携教授
日本学術会議会員
- 2009年 外務省 新日中友好21世紀委員会委員



Koichi Morimoto

もりもと こういち
森本 浩一 氏

前筑波大学 副学長・理事

- 1957年 兵庫県生まれ
- 1982年 東京大学大学院工学系研究科修了
- 1982年 科学技術庁に入庁
- 1983年 OECD・原子力機関(フランス)
- 2000年 在アメリカ日本大使館参事官
- 2006年 (独)海洋研究開発機構経営企画室長
- 2007年 内閣府政策統括官付参事官
- 2009年 文部科学省大臣官房審議官(研究開発局担当)
- 2010年 筑波大学副学長・理事
- 2012年 文部科学省大臣官房審議官(研究振興局担当)

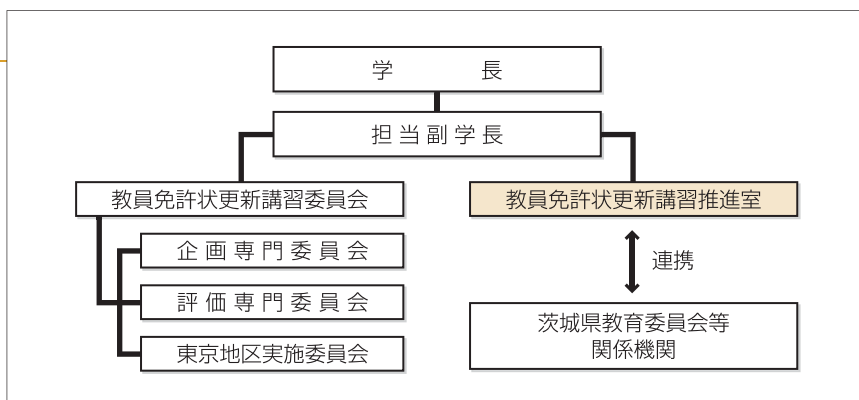


教員免許状更新講習推進室

平成19年6月の教育職員免許法の改正により小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の教員免許には有効期間が設けられると共に10年ごとに大学で講習を受けて免許を更新していく教員免許更新制が導入されました。これを受け、本学でも効果的、機能的に実施するために本推進室が設置されました。

構成員

東照雄副学長(附属学校教育局教育長)の下、本推進室長・室員の計11人と担当部署である教育推進部社会連携課、および附属学校教育局学校支援課、人間系支援室で、この更新講習に関する計画の立案および実施に関することを行っています。



大学院生のインターンシップとしても機能

上記メンバーの他に、講習日の当日やその前後に多くの大学院生にも協力をいただいています。彼らは、大変熱心に業務をこなし、私たちの間では「総括TA」と呼んでいます。業務の補助や多くの受講者(教諭等)との関係を通じて、インターンシップの機能を果たすとともに、本推進室のメンバーとも、業務以外でも懇親を図るなどして、社会に出る前の大変良い勉強にもなっています。

総括TA 栗原龍一郎君から

(人間総合科学研究科 障害科学専攻 博士前期2年)

総括TAとして2年間お手伝いをさせていただきました。その中で、TAの業務だけでなく、他の多くの業務に携わる機会を得て、学生では体験できない社会経験を積むことができました。また、大学職員の皆さんと一緒に仕事をさせていただくことで、学生生活では気付かない職員の方の心配りや、大学に対する想いを知ることができ、これらの経験が、自分にとって今後の糧になるものと思っています。

講習の内容と本学での特徴は？

【講習の内容】

教員の専門性や資質能力は教職全体を通じた不断の努力により、その高度化を図ることが求められています。

この更新講習は、10年ごとの受講が義務化されており、教員に必要とされる「教育の最新事情」(必修領域12時間)と「教科指導、生徒指導などの教育の充実」(選択領域18時間)に資するための講習を受講(計30時間以上)し、教員の資質向上を図るためのものです。

【本学の特徴】

- ①本学では、必修領域をAとし、選択領域を三つに区分(B、C、D)して、それらを「筑波カリキュラム」と呼び、総合的な講習や選択D「附属学校実践演習」は附属学校11校の先導的実践を学ぶ講習として位置付けしています。
- ②東京教育大学(前身を含め)からの教育研究の長い伝統と総合大学の特色を生かした多様な科目を開設し、受講生のさまざまなニーズに対応しています。

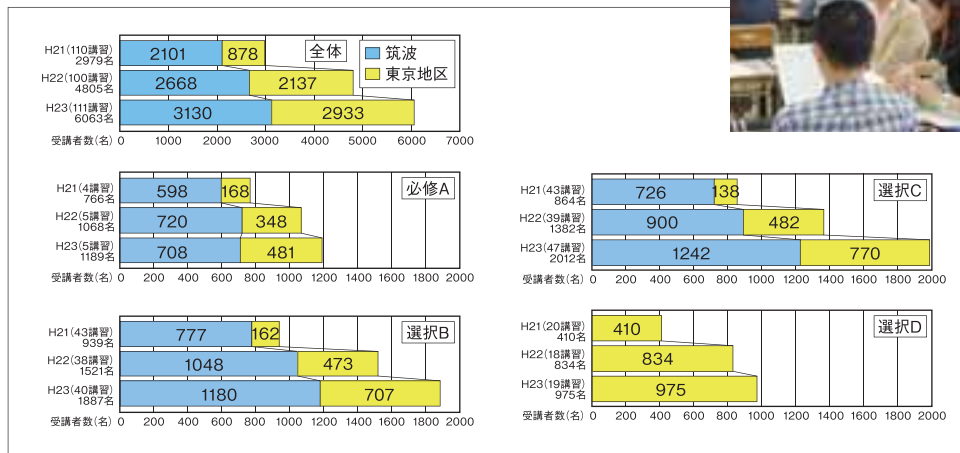
ひとロメ

➡本学では、毎年600~700人の学生たちが教員免許状を取得しています。社会に巣立って行った本学学生も含めて、現職の先生たちに最新の知識・技能を提供し、社会貢献の促進に寄与したいと考え、積極的に講習を開設しているところです。

- ③障害のある受講生に対しては、長年にわたる支援実績をもとに一般の受講生と共に受講できるよう配慮しています。

これまでの実績は？

平成21年度(本格実施初年度)：受講者2,979名、廃止が噂された平成22年度：1.5倍の4,805名、平成23年度：約2倍の6,063名が受講しています。年々受講希望者が増加してきています。講習の参加者は、全国の38都道府県におよび、全国的な講習となっています。



評価はどうか？

【過去3年間の評価】

各講習の事後評価は4段階評価で全体平均は3.4~3.5で推移しています。講習ごとに見ると必修A：3.3、選択B：3.5、選択C：3.4~3.5、選択D：3.6~3.7と、高評価をいただいています。特に選択Dは、受講者の72%が「よい」と回答しており、感想にも「今後に役立つ内容だった。ぜひ帰って実践したい。」など、

受講者のニーズにあった講習となっています。



【シンポジウムの開催】

21・22年度において受講者へのフォローアップの一環と翌年度受講者案内を兼ねて、一般公開のシンポジウムを開催しました。学識者による最新情報と茨城県

ひとロメモ

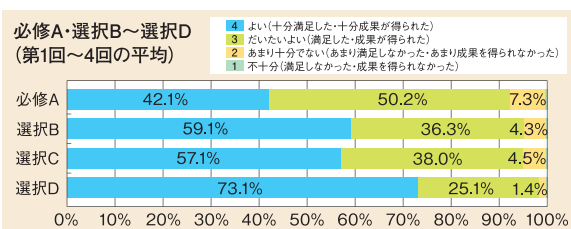
⇒ 23年度は、この事業が3年目になるため、これまでの取り組みについて自己点検・自己評価を行い、今年度も実施予定であるシンポジウムにつなげたいと考えています。

教育委員会および各学校の先生方の参加を得て議論しました。

● 受講者の事後評価の推移(4段階評価の平均値)

	全体	必修A	選択B	選択C	選択D
H23	3.5	3.3	3.5	3.5	3.7
H22	3.4	3.3	3.5	3.4	3.6
H21	3.5	3.3	3.5	3.5	3.7

● 本年度の各講習の事後評価の内訳(H23.11.9現在)



Message

本推進室からのメッセージ

● 講習順調→政権が交代した当時は、この制度が存続するのか廃止されるのかがはっきりしませんでした。そのため、2年目(昨年度)に講習を開設しなかった大学がありますが、本学は存続するものと判断し、粛々と計画、実施してきた経緯があります。本学の評価が確実に浸透し、受講者数も飛躍

的に増え続け、ますます本学への期待が高まっています。

● 全学体制→今後の自己点検・自己評価で課題も見え、改善を続けることが大切です。そしてこの講習を持続させるためには、大学および附属学校の多数の先生方のご理解とご支援が是非とも必要であることは疑う余地はありません。

● 社会貢献→大学の社会貢献の大きな柱として、また本学から今後とも巣立っていく学生達への生涯にわたる支援事業として、これからも担当者一同最善を尽す所存です。

—“優良事業”を目指して—

茨城県沖で発生する可能性が高まっています

に竜ヶ崎周辺でM7クラスのスラブ内地震がおきています。しかし、震源地が地下約50*と深いので、今回のような大震災になる心配はほぼありませんが、警戒は必要です。

地震による災害を軽減するために

巨大地震はいつ起きてもおかしくない、と恐怖感を煽るつもりはありませんが、いずれは必ず起こりますので、今から備えることが大切です。

地震による災害を軽減するため、本学では、「巨大地震による複合災害の総合的リスクマネージメント」というプロジェクトが動き出しています。地球科学だけでなく、構造エネルギー工学やリスク工学、社会システム工学、環境科学などさまざまな分野の先生方が集まり、学際的に取り組んでいます。

私たちが、緊急に実現すべきと考えていることの1つに、街灯や信号機の電力のバックアップシステムの整備があります。「車で逃げてはいけない」というのが、津波避難のセオリーなのですが、東北地方太平洋沖地震では、車で逃げた方が大勢いました。停電で信号が止まっていたために交通渋滞が起きて、命を落とした方も少なからずいらっしゃいます。今回は、

明るい時間帯に地震が発生しましたが、夜に起きていたら、被害はもっと大きくなったことでしょう。そこで、交通要所の信号機や、3本に1本程度の街灯に、停電後1時間程度機能し続けることができるように、非常用電源を整備していく必要があると提言しました。

想像力を働かせた避難訓練を

各自でできる有効な震災対策としては、どこにどのように避難すればよいか日頃から訓練しておくことです。いざという時、避難訓練をしているかいないかでは、大きい違いがあります。

さらに、型通りの訓練では不十分であるというのが東日本大震災での教訓です。マニュアルと違う不慮の状況が起きた場合でも対応できるよう、さまざまな

状況を想像し、自分で考えながら避難訓練をして、想定外の災害に遭った場合でも冷静に避難できるようにしなければなりません。

学生に避難訓練をさせる場合にも、「この場合はこうしなさい」と教えるのではなく、「どうすべきか」と質問を投げかけて、一人ひとりに想像させ、災害時には自分で考えて行動するように指導すべきでしょう。

なお、地震後に避難する際には、崩れる危険がある建物にいる場合を除き、建物から急いで飛び出す必要はありません。例えば、本学の建物にいる場合は、しばらく建物にいた方がむしろ安全です。

地震がいつ来るかを知ることができません。しっかりと備えて、いざという時にはパニックをおこさず、適切な判断を下して、自分の身を守りましょう。

や き ゆう し
八木 勇治 准教授(生命環境系)

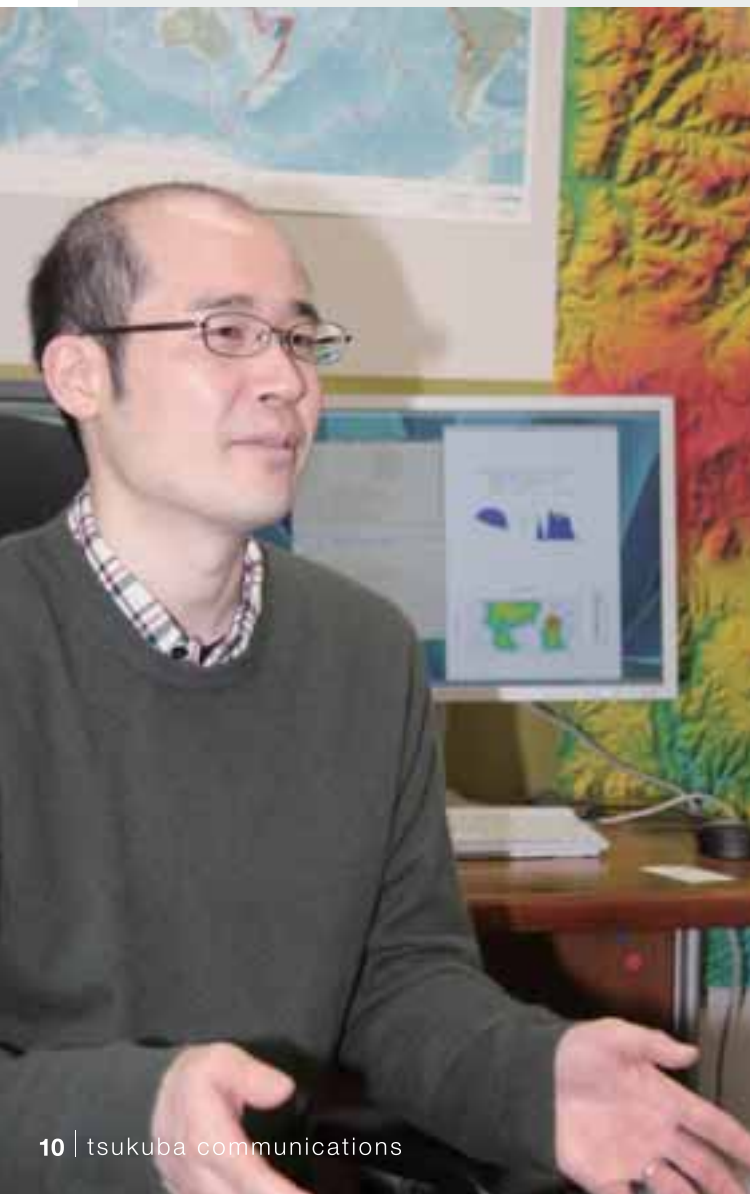
地球進化科学専攻 地球変動科学分野

1974年 岩手県生まれ

2002年 東京大学大学院博士課程(地球惑星科学専攻)修了

2002年 建築研究所研究員

2007年 現職



今後、つくば周辺に、巨大地震は起きますか？

東北地方太平洋沖地震 発生のメカニズム

日本列島は、北米プレート、ユーラシアプレート、太平洋プレート、フィリピン海プレートという4つのプレートがひしめき合う、世界有数の変動帯にあります。

そして、東日本の地殻を乗せた北米プレートは、太平洋沖に南北に走る日本海溝から北米プレートの下に沈み込んできている太平洋プレートに、東から西に押されている状態にあります。長い年月押され続けて蓄積したひずみが限界に達し、そのひずみが解放されたために起きた「プレート間地震」(海溝型地震)が、今回の東北地方太平洋沖地震です。海底が盛り上がり、大津波が発生しました。

地震波などのデータを解析したところ、プレートの滑りは50メートル近くにおよび、震源域は、南北450キロ、東西180キロに達していました。阪神淡路大震災を引き



起こした兵庫県南部地震(プレート内地震)の約1000倍のエネルギーが解放されたといえます。

プレートとプレートの中で発生する「プレート間地震」は、プレート内部で発生する「プレート内地震」や沈み込む海洋プレート内部で発生する「スラブ内地震」より巨大になる傾向があります。

余震は収束へ

3月11日以降、M5以上の地震は、日本全体で600回以上ありました。過去10年は、年平均120回程度でしたから、これは大変多い数ですが、そのうち450回は3月中にあり、最近1カ月では9〜10回と、以前と同じくらいの頻度になっています。

余震は収まってきているといえるでしょう。

M9クラスの地震の特徴

M8以下の地震と、東北地方太平洋沖地震のような、M9クラスの地震には、大きな違いがあります。

M8以下の地震は、地震が起きた領域のひずみの一部を解放するだけです。今回のM9クラスの地震は、M8以下の地震では解放できなかった部分も含めて、沈み込み帯全体のひずみを解放しています。全体のひずみが解消されたので、今後、震源域の宮城県沖では、地震が起こりにくい状態になっているように見えます。

茨城県沖巨大地震

今後、巨大地震が起きる可能性が高いのは、東北地方太平洋沖地震の震源域の周辺です。

巨大地震が起きると、莫大なひずみを解放するわけですが、ひずみが解放されたことによって、周りにひずみが添加され、同じメカニズムの地震が誘発されやすくなります。2004年のスマトラ沖地震は、東北地方太平洋沖地震と同じプレート間地震ですが、地震の後、震源域の周辺で、いくつもの大地震が発生しています。

こうしたことから、震源域周辺は巨大地震が起きやすい状況になっており、中でも、震源域南部の茨城県沖は、巨大地震が起こる可能性の高い地域の1つです。^{*}

ここでは、江戸時代(1677年)に、延宝房総沖地震が起こりました。M8前半で、茨城に6〜7メートルの津波がきたと言われています。その後、約330年以上にわたってひずみが蓄積しているところに、東北地方太平洋沖地震による負荷が加わったので、危険性がより高まったといえるでしょう。

また、つくば周辺では、二つの海洋プレートが沈み込んでいるためにスラブ内地震が起こる可能性があります。過去

^{*}2011年東北地方太平洋沖地震のすべり量分布。赤枠は歪みが開放されていない領域。



聴

14 学内組織紹介

菅平高原 実験センター

つくばキャンパスは、東西約1km、南北約4kmの自然に恵まれた広大なキャンパスで、東京ディズニーランドと東京ディズニーシーを合わせた面積の約2.4倍の広さを誇ります。広いキャンパスには様々な教育・研究組織がありますが、全てを知ることはなかなかできません。その組織や施設が、どのような目的で設置され、どのようなことをしているのかなど、各号で紹介していきます。

菅平高原実験センターは、夏はラグビー、冬はスキーのメッカとして有名な、長野県上田市にあります。同地に東京文理科大学菅平高原生物研究所として発足してから75年以上が経ち、この間に蓄積した気象や生物データを基に、生態系、水循環、炭素循環、気象・気候などの教育・研究を実践しています。

沼田 治
センター長



Introduce



正門より

自然豊かなフィールド

菅平高原は標高1,300m、近くの浅間高原、志賀草津高原とともに上信越高原国立公園内にあります。年平均気温は、6.5℃で北海道の稚内と同じくらいです。8月の平均気温は20℃を下回り、夏は涼しいのですが、冬の寒さは厳しくマイナス29℃を記録したこともあります。「この土地は、黒ボク土とよばれる土壌で、本センターは、アカマツ林、

広葉樹林、樹木園、草原に分かれており、樹木園は、5月にピンク色のカタクリの花が咲き、草原では、6月になるとワラビが一面を覆い、秋にはススキに、その後は、雪景色へと変化します。また、センター内において、リスやカモシカの動物をはじめ、数々の昆虫も見かけることができる、まさに自然の宝庫、この豊かなフィールド35haが本センターの財産です」と語るのは、沼田治センター長。そのセンター長の下、18名の教職員が教育、研究、地域貢献等にあたっています。

夏の期間は実習生でいっぱい

このフィールドを利用して、本学学生はもとより、他大学やSSH校や未来の科学者養成講座の高校生グループも動植物等についての実習を行います。6月～8月を

中心に20団体程が訪れるこの季節、教職員はまさに“てんてこ舞い”。未来の人材育成のため、日々励んでいます。

多様な研究

本センターに所属する教員、大学院生を中心に、生物多様性分野としての昆虫、菌類の研究と生態・環境科学分野の研究を行っています。また、本センターは、国内外の研究者にも開放されており、生物科学、地球科学、農学関係など広く活用されています。現在、本学の農林技術センター（井川演習林、八ヶ岳演習林）、陸域環境研究センター、信州大学、岐阜大学と連携し、中部山岳地域の多様性生態系研究を進めており、教員、学生合わせて120名程のスタッフが本連携プロジェクトに参加しています。

フィールドを利用した実験

草原

草原の植生遷移研究のために、毎年きれいに手入れしている草原の一部を利用して、手入れをしない「放棄」、植物を燃やす「火入れ」、草原を掘り起こす「耕起」のフィールドを作り、草原がどのように変化するかを数十年かけ観察する実験が昨年スタートしました。



草原での作業風景

実験林

実験林では、若いアカマツ林、アカマツ主体の混交林、開設当時から手つかずの自然林の3つの林で構成されており、放置し続けることにより、森林がどのような過程で変化していくのかを長い年月にわたり研究しています。



アカマツ混交林

大明神の滝



8月



2月



カタクリの花



大明神寮



ニホンリス



キキョウ



カケス

地域貢献の幅広い展開

近年、地域貢献の一環として、色々な活動を展開しています。青少年はもとより、主婦、会社員、シルバー世代に渡る幅広い年代の方を対象に公開講座、自然体験学習やセンター内を散策するツアーなどを実施しています。

特に、昨年の冬から開催している「大明神の滝ツアー」は、通常非公開にしているセンター内の大明神沢にある落差10mの滝を見学するというもの。12月下旬から3月上旬にダイナミックに凍る、その滝の見学と、

雪上に残された動物の痕跡を追いかけ、動物の生態を読み取るアニマルト

ラッキングを兼ね備えたツアーで、地元上田市をはじめ県外からも多数の参加があり、好評を博しています。

地域とともに歩むセンターを目指して

このように、地域に広く開放している同センターは、地域の観光協会や上田市とも連携し、菅平高原とともに歩むセンターとして、地元の方々に愛される施設に発展することを目指して、協議を始めています。

また、本センターの公開講座「ナチュラリスト養成講座」の受講生が中心となり結成した、ボランティア組織「明神会」と連携し、同センターの広報活動を実施する準備を進めています。

これからのセンター

同センターのような山地を対象にした教育

研究施設は、国内では、東北大学植物園八甲田分園、信州大学志賀自然教育研究施設、九州大学農学部附属彦山生物学実験施設などしかなく、同センターが国内最大の規模と体制を誇っています。「今後は、全国共同利用化も視野に入れ、センターがどのように発展していけるかを議論しているところです。理想としては、本フィールドを活用して、学内外はもとより、海外からの研究者も含め、異種分野の研究者たちが連携し、さまざまな研究を行い、ディスカッションできる場として機能させたいと思っています。幸いにも、現センターは、若い研究者が多く、アグレッシブで前向きな方々ばかりなので、センターの未来は大いに楽しみです」と沼田センター長は、前を見据えています。



高校生公開講座

附属学校の 名物先生 登場!

4

本学には、東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県に 11校の附属学校があり、いずれもそれぞれの分野でわが国の教育をリードしています。
そこには、全国でも有名な先生たちが大勢います。
このコーナーでは、各学校の名物先生を順次紹介しています。

今回の先生

筑波大学附属視覚特別支援学校

たか み せつ こ
高見節子 教諭

東京都生まれ
大学を卒業後、代替教諭を経て、
現在筑波大学附属視覚特別支援
学校幼稚部教諭

Profile



「美味しそうでしょ?」

附属視覚特別支援学校の幼稚部で長年教諭を勤める高見節子先生。幼稚部の教室を訪れると、高見先生が子供たちに優しく声をかけながら、粘土遊びの保育を行っていた。

粘土を袋から取り出し、柔らかくなるようにこねる。少し柔らかくなったところで、粘土に好きな色を付けていく。

「私はピンク!」「私は黄色にしようかな」

子供たちが自分の好みの色を選び、着色材を粘土にまぶし、再び子供たちが粘土をこねていく。好きな形を作り、カラフルなトッピングをすれば、アイスクリームやケーキが出来上がる。子供たちは全盲や弱視の障害があるが、「おいしそうでしょ?」と、上手に形を作り色鮮やかな作品を元気よく見せてくれた。



「視覚障害は、情報障害と言われています。周囲の環境や状況を、子供たちがどうやって受け入れていくかを見守ることが、とても大切です」

視覚で受け取れない情報を、耳や手を使って捉えるために、教室の中はさまざまな工夫がされている。例えば、子供たちのロッカー、鞆掛け、エプロン掛けには、共通のマークが付けられているが、どれも凹凸がついていて、触れば形が分かるようになっている。ウサギ、星、ぶどう、

パトカー……、子供たちはそれぞれのマークで自分の持ち物の場所を判断することができるのだ。



自分でできたという実感

乳幼児は一人ひとりの成長の度合いが大きく違う。それぞれの発達に合わせて、「自分でできた」と自覚させることが重要と高見先生は言う。

「今日の保育でも、粘土を袋から上手に出せない子もいました。『先生、できない』と言ってきたとき、こちらが手を貸すのではなく、袋がぐちゃぐちゃになってしまっても、本人に最後までやらせることが大事です。粘土がどういう状態で目の前にあるのか、何でも触って確かめる。こちらが安易に手を出してしまうと、どういう状態かを知ることができないだけじゃなく、自分たちの“気づき”を持ちにくくなってしまいます。『自分でできた』っていう実感をもってもらって、物事に取り組んでいく意欲や姿勢を育んでいきたいと思っています」



「育児学級」で子育て支援

視覚特別支援学校は、1880(明治13)年に開校された、本校の中でもとくに歴史ある教育施設。幼稚部から高等部、さらに高等専攻科までが設置され、3歳から60歳代までの視覚障害者が200人程通っている。幼稚部では、3歳から就学するまでの子供たちが、遊びを中心とした保育を通じて、生活習慣の中での自立を目指している。

また、幼稚部では0歳児から2歳児の子供たちや保護者を対象とした育児学級をおこなっている。視覚障害児の保護者が、子育ての手がかりを見つけ、自信を持って育児ができるようにサポートすることが狙いだ。育児学級は、大きく分けて「グループ活動」と「ミニ講座」が主な活動で、「グループ活動」は週に1回、「ミニ講座」は月に1回のペースで開催している。

「グループ活動」は、子供と保護者が一緒に遊び、乳幼児の遊びを通じた支援の場を提供している。遊びや体験活動を通して、

子供たちは物の触り方や見分け方を覚えていく。大人の一方的な押し付けではなく、子供が主体的に楽しんで遊び覚えていくよう保護者と一緒にサポートすることが目的だ。

「ミニ講座」は、保護者が話し合っコミュニケーションをする場。その間、子供たちは保育室で好きな遊びを楽しんでいる。兄弟・姉妹の参加もあり、子供同士も交流している。教員が提起したテーマをもとに、個々の実態を出し合い、保護者の話し合いの場として、意見交換をすることで、日常の生活を振り返る機会になるのだ。幼稚部の教員に加え、卒業生、その保護者、大学や小学部の教員などが講座に参加し協力してくれている。

そのほか「育児相談」も受け付けている。

そのほか「育児相談」も受け付けている。



相手の気持ちを 受け止めていく

育児学級の参加者からは、「定期的に通うことで、子供の成長がみられた」「本の選び方が参考になり、絵本が好きになった」「見ることへの理解が深まった」などの声が届けられている。「小さい子にとって視覚から得られる情報は全体の80%とも言われています。ところが自分の子は見えない、見えにくい。となると、誰でも最初は『どうすればいいの?』となります」

育児に不安を抱えている保護者に向き合うために、もっとも重要なことは何だろうか。

「やはり、保護者の気持ちに寄り添って受け止めていくことが大切。『このお母さんに、これを伝えなきゃいけない!』って思っていると、伝えることに一生懸命になってしまいます。まずは、お母さんの気持ちを受け止めて、どうすれば問題が解決するか、一緒に考えていくように心がけています」

保護者の気持ちを受け止めることも、子供たちの気持ちを汲み取っていくこと

とも、根っこでは共通している。後輩の先生にも、そのことを伝えていきたいと高見先生は言う。



星 祐子 副校長

「高見先生、みて、みて!パズルができた!」、「高見先生、いっしょにお店屋さんごっこしよう!」、保育室に楽しそうな子どもたちの声が響いています。

本校幼稚部は、3歳児から5歳児までの在籍児に加え、0歳から2歳児までの早期支援を行っています。その大黒柱が高見先生です。待ち望んでいた我が子の誕生、そのお子さんに障害があるとわかった時

の保護者をはじめとした周囲の方々の様々な思いをしっかりと受け止め、一緒に悩み、考え、歩いていく姿勢に、子どもたちの「高見先生、大好き」はもちろん、保護者の方も絶大な信頼を寄せています。

そんな高見先生、学生時代は体育大学でテニスに励んでいたという経歴の持ち主だけあって、よく通る凛とした声は体育会系!と納得する一面も持っています。

弓道部



400年にわたる弓道の伝統を
忠実に継承する誇りを胸に!



本年度は、男子9人、女子4人と部員が少ないにもかかわらず、「全日本学生弓道選手権大会」で男子ベスト8、女子ベスト16と健闘した弓道部(森俊男監督)。応用理工学類3年の神野皓平キャプテン他、体育専門学群以外の学生も多い中、学業と両立しつつ、活発な活動を行っている。

現部員のほとんどは経験者だが、弓道は、大学から始めても優勝が狙える競技。本学弓道部OGで、NHKアナウンサーの青山祐子さんは、大学から弓道を始め、2年時に「三十三間堂弓道大の全国大会」で個人優勝し、卒業時には四段に昇段したという。

弓道には幾つかの競技法があるが、学生弓道は、28^{センチ}先の直径36^{センチ}的をを狙う近的競技がメイン。団体戦は、多くの

場合、女子は3人、男子は5人もしくは8人のチーム戦で、1人4射して、的中数の合計で勝敗を決める。

目指すは、全日本学生弓道選手権大会と全日本学生弓道王座決定戦での優勝。大きな大会になるほど、観客も増え、緊張感が増していく。しかし、選手たちは口を揃えて、その緊張感こそが弓道の魅力だと言う。

伊藤杏奈女子キャプテン(体育専門学群2年)は、「普段味わえない緊張感や、大勢の観客に拍手してもらって快感が好きです」と、「緊張」を楽しみにしている様子。「練習では簡単に中(あた)りますが、だんだん緊張してきて、普段通りにいかなくなります。どうも気持ちの持ち方をすれば中(あた)るのか、毎回の試合で、緊張感に挑戦する感じが面白いと思います」とは、関東学生弓道選手権大会で個人優勝を果たした谷口志緒里選手(同2年)。団体戦も優勝し、全国から勝ち上がった10大学で競う「全日本学生王座決定戦」に駒を進めた。

練習では、1つの的に対して多くの射手が矢を射る「射込み」の後、試合形式で射る「立錬」を行う。森監督が、週に1回程度選

手を指導して、アドバイスをカードに記入、その他の日は、上級生がそのカードを見ながら下級生を指導する。「射術400年の伝統を忠実に守り、弓道を長くやっていくことで初めてある境地に達することができます。試合での的中率を上げることを目指すのではなく、伝統を守り、伝統を守るということをメインに指導しています」と森監督。

本学には弓道研究室があり、弓の道具のことや昔の伝書の解釈など、弓道について広く学べる環境にある。さらに、合宿などでは、森監督が弓道に関する勉強会を開くという。「高校でも弓道をやっていましたが、高校では、弓道そのものを学ぶ機会がなかったので、大学で、深く弓道を知ることができてよかったです」と、神野キャプテン。

また、本学弓道部独自の活動として、海外への弓道普及





活動がある。本学の前身である東京教育
大学に招聘され、「弓道学」の研究室を
設けた稲垣源四郎氏が、1969年から
ヨーロッパでの射術指導を開始して以来、
本学出身の指導者数名が、年2回、継続的
に指導を続けている。希望する部員は
参加することができ、春には3年生が1人、
3週間イタリアに同行した。例年、海外から
弓道を学びに来て、大学会館に泊まり
ながら、学生たちと稽古する人もいる。

日本の頂点を狙いながら、学業に励み、
日本の伝統と国際感覚を学んでいる弓道
部員たち。弓道部の今後の課題を尋ねる
と、森監督はにこやかに、「課題は部員を
増やすことですね。部員たちは、言うことな
いくらいよく頑張っています」と、部員たち
の日々の努力を称えていた。



前身の師範学校から140年の歴史を有し、オリンピックの
金メダリストを始め、優秀な選手を多数輩出している本学の体育会。
主な競技成績および今後の試合日程を紹介しますので、
是非、各フィールドに足を運び、熱き声援を送ってください。

[つくばスポーツ ONLINE]

<http://club.taiiku.tsukuba.ac.jp/>

【筑波大学体育会】

<http://www.sakura.cc.tsukuba.ac.jp/~taikukai/>

弓道部

■ 第43回 関東学生弓道選手権大会決勝大会 女子団体 **優勝**
【女子個人】**優勝** 谷口志緒里(体専2年)

剣道部

■ 第59回 全日本学生剣道優勝大会 **優勝** ※9年ぶり10度目
■ 第30回 全日本女子学生剣道優勝大会 **優勝** ※2年ぶり8度目

女子バスケットボール部

■ 関東大学女子バスケットボールリーグ戦 **優勝** ※3年ぶり16度目
■ 第63回全日本大学バスケットボール選手権大会 **第3位**

陸上部

■ 第51回実業団・学生対抗陸上競技大会
【男子800m】**優勝** 中村康宏(体専3年) 1分50秒43
【女子円盤投げ】**優勝** 高橋亜弓(同4年) 52m87 **関東学生新記録**
■ 2011日本ジュニア・ユース陸上競技選手権
【女子ハンマー投げ】**優勝** 大崎かな(同1年) 55m30 **大会新記録**

柔道部

■ 平成23年全国日本学生柔道体重別選手権大会
【男子66kg級】**優勝** 小倉武蔵(体専4年)
【女子48kg級】**優勝** 遠藤宏美(同1年)
■ 世界ジュニア柔道選手権
【女子48kg級】**優勝** 遠藤宏美
■ 講道館杯全日本体重別選手権大会
【女子78kg級】準優勝 緒方亜香里(同3年)
【男子90kg級】3位 西山大希(同3年)
■ 柔道グランドスラム・東京大会
【女子78kg級】**優勝** 緒方亜香里
柔道ワールドカップ・チンタオ大会
3/19 中国・青島

ラグビー部

■ 関東大学対抗戦 **第2位**

体操部

■ 第17回全日本ラート競技選手権大会
【男子総合】**優勝** 田村元延(体育学専攻博士前期2年) ※4連覇
第2位 高橋靖彦(同2年)
【男子種目別】「直転」**優勝** 田村元延
【女子総合】第2位 堀口文(体専3年)
第3位 堀場みのり(体育学専攻博士前期2年)
【女子種目別】「直転」「跳躍」**優勝** 堀口文
■ 平成23年度関東学生新人体操競技選手権大会 女子団体総合2位

蹴球部

■ 第85回関東大学サッカーリーグ戦 **第4位**

テニス部

■ 第2回筑波大学国際テニストーナメント
3/31～4/8 本学他

ダンス部

■ 第49回筑波大学ダンス部公演
3/26 THEATER1010

アイススケート部 フィギア部門

■ 国公立大会
3月8～10日 名古屋

舞	踏	
研	究	会

優美な踊りは、厳しい練習の賜物
“勝つために”“好きだから”踊る…



優雅なワルツが流れる中、一生懸命踊る1年生ペアと、それぞれのペアに厳しいまなざしを向ける指導係。指導担当以外の上級生は、周囲を取り囲み、にこやかに手を振りながら、1年生の名前を明るく呼び続ける…毎週水曜・金曜18時15分から行われる1年生のための練習会の風景。練習場である課外活動練習施設に一步踏み入れると、圧倒されるほどの熱気にあふれていた。練習を一段と盛り上げている名前の呼びかけは、競技ダンスの公式試合でも行う応援コールだという。

競技ダンスは、勝ち・負けのあるハードな“スポーツ”

「舞踏研究会」(松井圭介顧問)は、競技ダンス・社交ダンスのサークル。

競技ダンスとは、社交ダンスを、審査員が、ポイズ(踊り手の格好)、リズム、ムーブメント(動きの表現)という3つの基準を中心に審査し、勝敗を決定するもの。モダン4種、ラテン4種という計8種目の踊りで競う。

同サークルは、東部日本学生競技ダンス連盟の1部校として、全国優勝など、数々の大会で輝かしい成績を残してきた。現在、部員数は、男子25人、女子36人の61人。所属学群はさまざまで、丸山真太郎主将は、応用理工学群の3年生。高校時

代は野球部だったが、先輩の情熱に魅かれて入部した。

「競技ダンスは、オリンピック種目の候補にあがるほどのスポーツです。

腹筋などの筋力トレーニングも必要ですし、野球部時代の運動量と比べても、引けを取らないくらいハードな練習をしています。練習は厳しいけれど、大会で勝つと、最高に嬉しいです。他のスポーツ競技との違いは、他大学を含めて、ほとんど全員が大学生から始めるということで、“大学から始めてチャンプになれる”というのが、うちのサークルのキャッチフレーズなんです」(丸山主将)。



このコーナーでは、課外活動として、演奏会や展覧会、発表会、大会、ボランティア活動などで、その腕前を披露している、文化系・芸術系サークルの催しを紹介します。

【筑波大学芸術系サークル連合会】ホームページ <http://www.stb.tsukuba.ac.jp/~geisa/>

【筑波大学文化系サークル連合会】ホームページ <http://www.sakura.cc.tsukuba.ac.jp/~bunsa/>



厳しい練習を支えているのは、仲のよさと、オフの楽しさ

全員が初心者から始める競技ダンスだが、上級生の指導を受けるのは、1年生の間だけ。2年生以上は、1年生終了時に決定した固定ペアによる自主練習となる。練習日時は決まっていないが、練習量は多く、土日を含め、毎日練習している人がほとんどだ。

「悪く言えば重い、良く言えば充実感のあるサークル。衣装代などもかかって大変な分、先輩・後輩や同じ学年の仲間とのつながりを大切にして、みんなで乗り越えている感じです」とは、荒井栄里香副将(比較文化学類3年)。

活動にメリハリをつけ、遊ぶ時は徹底

的に楽しむというのも同サークルの魅力。春と夏に行う5泊6日の合宿は、朝から晩までダンス漬けの厳しいものだが、後日、1泊2日のお楽しみ合宿を行い、ダンスを忘れて楽しく遊ぶ。

踊ることがとにかく楽しい。一生踊り続けたい…

お姫様のようなドレスに憧れて入部した荒井さんは、今、ドレスより踊りに夢中だ。「大会でドレスを着るのは嬉しいのですが、プレッシャーがあり、楽しむどころではありません。だから、一番楽しいのは、普段の練習で、自分のペアと一緒に踊っている時です。踊るのは本当に楽しくて、一生踊り続けたいと思っています」と、熱い想いを語ってくれた。

競技ダンスが好きで、競うのは苦手だけど社交ダンスが好きで…サークルの楽しみ方は人それぞれだが、全員に共通しているのは、とにかく踊りが好きなこと。多くの卒業生が競技ダンスや社交ダンスを続けていて、中には、ダンスのプロになる人もいます。昨年度の卒業生は、物理学類の男性1人と芸術専門学群卒の女性1人が、プロになったという。

そんな卒業生や、地域の社交ダンス愛好家を楽しみにしているのが、同サークルが年4回、1学食堂で主催するダンスパーティだ。部員たちをこれほどまで虜にするダンスの魅力を知りたい方は、一度覗いてみてはいかがでしょうか。



津軽三味線倶楽部 無絃塾

■ 第14回卒業公演 1/21
場所/ノバホール
時間/午前の部 10:00開場/10:30開演
午後の部 16:00開場/16:30開演
料金/一般3000円/学生1500円

ギター・マンドリン部

■ 平成23年度定期演奏会 2/18
場所/ノバホール
時間/14:00開場/14:30開演
料金/無料

THK筑波放送協会 記録

■ 第28回 NHK全国大学放送コンテスト 12/3.4
音声CM部門 2位/LIVE部門 優勝/
ラジオドラマ部門 2位・3位/映像CM部門 2位/
映像番組部門 1位(文部科学大臣奨励賞も受賞)・2位

ドイツ連邦共和国大統領来学

本学の国際交流の発展および教育研究に多大な貢献をしたクリスティアン・ヴルフ ドイツ連邦共和国大統領への筑波大学名誉博士号授与式が10月25日、大学会館ホールにて執り行われ、引き続き、日独交流150周年を記念し、大統領による特別講演会が開催されました。参加者がホールの収容人員を大幅に超えたため、講演内容を同時放映する会場を別に設けるほどで、参加者は大統領の講演に

熱心に耳を傾け、講演終了後には、本学学生から次々と質問があり、活発な討議が行われました。なお、本学は2009年12月に筑波大学ボン事務所をドイツ・ボン市に設置し、ドイツの大学・学術機関との学術交流および学生交流を戦略的に推進しており、今回の大統領の訪日を機に、日独の交流がますます発展することが期待されています。



筑波大学名誉博士号授与式



講演終了後、質問する本学学生



講演をするクリスティアン・ヴルフ ドイツ連邦共和国大統領

T O P

東北大学、仙台市と藻類バイオマスに係る共同研究協定を締結

本学は、東北大学、仙台市と連携し、生活排水を吸収して石油成分を効率的に生産するシステムの研究を共同で実施するため、11月10日に三者協定を締結しました。

締結式では、山田信博学長、井上明久東北大学総長、奥山恵美子仙台市長らが出席し、締結書にサインをしました。

今後は、藻類「オーランチオキトリウム」を使用し、本学が培養技術の開発を担当、東北大学は燃料を効率的に抽出する研究を行い、仙台市がフィールドを提供することとし、三者間共同で実証実験を進めていく予定です。



笑顔で握手する3者



記者からの質問に答える渡邊 信教授(右)



荒川静香氏の講義を熱心に聞く学生たち

震災復興に向けた連携・協力協定を締結



本学は、「震災復興に向けた連携および協力に関する協定」を下記の各市と結び、総合大学としての強みを生かし、積極的に、震災被害の大きかった地域、そして日本の再生をサポートしています。



保立一男神栖市長(右)から震災被害について説明を受ける山田信博学長(中)



記念撮影に応じる草間吉夫高萩市長(左)と山田信博学長

- | | |
|--------|---------|
| 11月21日 | 茨城県潮来市 |
| 11月28日 | 福島県伊達市 |
| 11月29日 | 茨城県神栖市 |
| 12月2日 | 茨城県北茨城市 |
| 12月6日 | 茨城県高萩市 |

ICS

プロフィギュアスケーターの 荒川静香氏が本学で講義



トリノ五輪(2006年)の金メダリストでプロフィギュアスケーターの荒川静香氏が11月14日、「IMAGINE THE FUTURE. 未来構想大学講座」の一つである「勇者の鼓動-未来を創るスポーツ王国論-」(塾長:松田裕雄講師(体育系))の2コマで講師を務めました。「大事な本番を楽しむために、また自らの想いをブレずに守り続けていくためには、己の意識をどう高めて行くのか?」をテーマとしたこの講義には、300人以上の学生および教職員が出席し、熱心に耳を傾けていました。

荒川氏は、講義の最後に、「五輪で金メダルを獲れたのは自分に負けなかった証、自分と向き合うことに関しては誰よりも努力をした。皆さんも自分と向き合い、



自分をよく知ってほしい。どんな失敗も無駄にはならない」と締めくくりました。

平成23年度「博士課程教育リーディングプログラム」の採択

文部科学省の平成23年度「博士課程教育リーディングプログラム」に「ヒューマンバイオロジー学位プログラム」が採択されました。

本学では、この学位プログラムに代表されるような学術分野横断型の各種教育研究プログラムを立ち上げているところで、これらの学位プログラムを束ね、一つの

教育担当部局として機能できる「グローバル教育院」(School of Integrative and Global Majors)を、教育担当副学長を長として設置しています。

採択プログラムの概要

区分:【複合領域型(生命健康)】

プログラム名:「ヒューマンバイオロジー学位プログラム」

プログラムコーディネーター:永田 恭介(筑波大学学長特別補佐)

プログラム概要:

生命科学、医学、計算科学、物質科学を横断した複合的方法論を駆使して、ヒトの生命の維持、適応、継承のメカニズムを理解し、これらに関する研究力、専門力を修得した上で、ヒトが人らしく生きる社会の創造を先導できる国際的トップリーダーを養成します。

ヒューマンバイオロジー学位プログラム概念図

学住近接・自転車社会
人間味溢れるコミュニティ
自然豊かで広大なキャンパス

ヒューマンバイオロジーの背景

- ・開学時から人間生物学コース(学士、国内唯一)
- ・我が国最初の医科学修士
- ・生命領域学際研究センターの改組
- ・生命数理モデルによる革新的システム医学研究拠点化事業

つくばスタイル

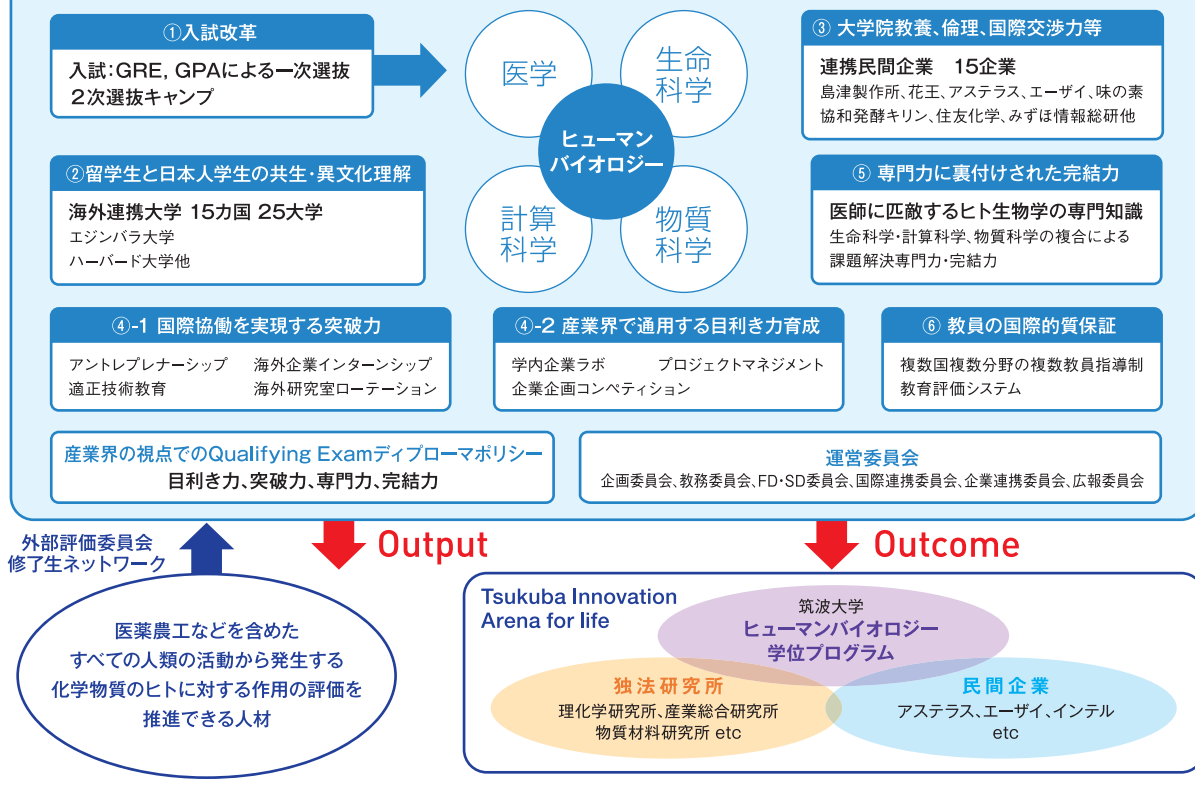
都心まで1時間圏内
(オックスブリッジ・プリンストン型)
研究学園都市・国際都市・田園都市

国際化推進の背景

- ・留学生・外国人教員比率No.1
- ・国際化拠点事業(G30)
- ・文科省「武者修行応援プロジェクト」
- ・文科省「若手研究者海外派遣事業」

複合型プログラムを活性化する新教育研究体制への移行 筑波大学教育イニシアティブ機構

ヒューマンバイオロジー学位プログラム





本学の社会貢献プロジェクトの1つである「つくちゅうシネマワークショップ」が9月18日～10月30日の日曜日に開催され、11月3日には、本学メディア・ユニオンホールにて完成上映会が開かれました。

同ワークショップは、つくば市内の中学生を対象に、映像で表現する力の育成を目的とし、本学の教員や学生が中心となって指導にあたっており、図書館情報メディア研究科が有するコンテンツ制作教育環境を提供しています。定員は15人、会費は2000円(保険料、DVD代他)。中学生たちは、プロの映画監督の指導や学生のサポートを受けながら、監督、俳優、撮影、録音、照明、編集といった、映画製作に必要なプロセスを体験し、自分たちの力で10～15分のショートムービーを制作します。

5回目となる今年は、12人の中学生が

参加し、『秋のホワイトデー』というタイトルのラブストーリーを制作。映画監督の月野木隆氏と西岡貞一教授(図書館情報メディア系)他、教員1人、学生5人のスタッフが指導、サポートしました。

「デジタル技術が普及して、プロでなくても、自由に映像コンテンツが作れるようになりました。企画会議なども、企画書だけでなく、映像を使って行うようになるこれからの時代は、”自分のメッセージを映像で伝える技術”を身につける必要があります。アメリカやオーストラリアなどでは、中学校で映像教育の授業が行われていますが、日本の中学校には、まだ、教えるための設備もシステムもないため、こうしたワークショップを企画・開催しています。そして、ここで積み重ねたノウハウを、どこの学校でも映像表現が教えられるような映像教育システムとして構築したいと考えてい

ます」と、西岡教授。

同ワークショップでは、参加者全員が順番に監督を務め、パソコンを使って、自分が監督をした部分の編集を行います。ワークショップで使う最低限の機能だけに限定して操作法を教えるため、パソコンに不慣れな子でも、指導開始から4時間くらいで編集することができます。「参加2年目の子どもたちが、上手にテキパキと編集しているのを見ると、昨年教えたことが身についているなど実感します」(月野木監督)。

「将来は映画編集の仕事がしたいと思った」「違う学校や学年の友だちができて嬉しかった」という子どもたちは、力を合わせて1つの事をやり遂げたという達成感、満足感に満ちた笑顔で輝いていました。同時に制作したDVDは、貴重な経験と共に、一生の宝物となることでしょう。



指導する月野木隆監督と西岡貞一教授(右)



学生宿舎リニューアル改修が 「公共の色彩賞」を受賞

本学学生宿舎は、中長期的な計画の基、老朽化等により早期に改修が必要な25棟を対象に、平成21年度から5ヵ年計画でリニューアル改修を実施しています。この改修棟の色彩事例が11月27日、東京芸術大学で開催された第27回フォーラム「公共の色彩を考える」において「第25回公共の色彩賞—環境色彩10選—」に選出されました。

今回の学生宿舎のリニューアル改修にあたっては、従来の宿舎の色彩がモノトーンで、多感でアクティブな学生が生活する環境としては均質過ぎることから、西川潔副学長の監修の下、山本早里准教授(芸術系)の協力を得て行われたものです。



●主な受賞等一覧

受賞名	受賞者(所属・学年)	指導・研究室
平成22年度特別研究員等審査会専門委員(書面担当)表彰	稲垣敏之教授(システム情報系)	_____
日本植物学会賞特別賞	鎌田博教授(生命環境系) 小野道之准教授(生命環境系)	_____
第10回(2011年)ドコモ・モバイル・サイエンス賞 社会科学部門奨励賞	石井夏生利准教授(図書館情報メディア系)	_____
災害医療に関する調査研究助成	磯辺智範准教授(医学医療系)	_____
こども環境学会主催「子どもが元気に育つまちづくり 東日本大震災復興プラン国際提案競技」銀賞(優秀賞)	村尾修准教授(システム情報系) 川崎拓郎(システム情報工学研究科 社会システム工学専攻 博士前期2年) 星知世(理工学群 社会工学類4年) 古徳風空(理工学群 社会工学類4年)	村尾修准教授(システム情報系)
平成23年度日本動物学会川口賞	中野裕昭助教(生命環境系 下田臨海実験センター)	_____
SSDM Young Researcher Award	都甲薫助教(数理物質系)	_____
独立行政法人日本学術振興会科学研究費 補助金第1段審査表彰	門脇和男教授(数理物質系) 指田勝男教授(生命環境系)	_____
優秀論文奨励賞	坂入洋右准教授(体育系) 中塚健太郎特任助教(体育系)	_____
日本糖尿病合併症学会Young Investigator Award	矢作直也准教授(医学医療系)	_____
2011年度地理情報システム学会賞(著作部門) 大会優秀発表賞	村山祐司教授(生命環境系) 大谷万里絵(生命環境科学研究科 地球科学専攻 博士前期1年)	村山祐司教授(生命環境系)
ヤマハ最優秀発表論文賞	仙石泰雄助教(体育系)	_____
黒住医学研究振興財団第19回研究助成金	山内一由准教授(医学医療系)	_____
川井記念賞	徳田克己教授(医学医療系) 水野智美准教授(医学医療系)	_____

※所属、職名、学年は受賞年時

●主な受賞等一覧

受賞名	受賞者(所属・学年)	指導・研究室
Complex Adaptive Systems 2011, Best Theoretical Paper Award	イリチュ(佐藤)美佳准教授(システム情報系)	—————
関東脳神経外科懇話会2011年度年次奨学賞	阿久津博義病院講師(附属病院)	—————
The 2011 IEEE International Conference on Granular Computing, Best Paper Award	宮本定明教授(システム情報系) 佐美怜(システム情報工学研究科 リスク工学専攻 博士前期1年)	—————
平成23年度全国大学農場教育賞(全国大学附属農場協議会)	加藤盛夫助教(生命環境系)	—————
第27回日本ストレス学会学術総会 学会奨励賞(高田賞)	根本清貴講師(医学医療系)	—————
ゴードン・ベル賞 最高性能賞	朴泰祐教授(システム情報系/計算科学研究センター) 高橋大介准教授(システム情報系/計算科学研究センター) 辻美和子研究員(計算科学研究センター)	—————
第8回日本e-Learning大賞文部科学大臣賞	小田竜也講師(医学医療系)	—————
第59回電気科学技術奨励賞	青柳秀紀教授(生命環境系)	—————
アジア・太平洋経済協力(APEC)プロジェクト「授業研究による算数数学教育の革新—防災科学と数学的問題解決」を受託	磯田正美准教授(人間系)	—————
2011年度有機合成化学協会研究企画賞「セントラル硝子研究企画賞」	藤田健志助教(数理物質系)	—————
Honorary Doctorate Degree of Philosophy (Mathematics Education) / 名誉哲学博士(数学教育学), タイ王国コンケン大学	磯田正美准教授(人間系)	—————
The 2nd International Fuel Cell Summer Seminar for Young Scientist 2011 Poster Award	櫻井雅崇(数理物質科学研究科 物質創成先端科学専攻 博士後期1年)	中村潤児教授(数理物質系)
日本機械学会若手優秀講演フェロー賞	谷口真(システム情報工学研究科(博士後期課程)構造エネルギー工学専攻1年)	亀田敏弘准教授(システム情報系)
優秀ポスター賞(ポリスケールテクノロジー研究会2011) 優秀ポスター発表賞(触媒学会2011秋第108回触媒討論会)	森綾香(数理物質科学研究科 物質創成先端科学専攻 博士前期2年)	中村潤児教授(数理物質系)
第8回カテキン学会優秀プレゼンテーション賞	石山あやね(生命環境学群 生物資源学類4年)	宮崎均教授(生命環境系)
日本陸水学会第76回大会優秀ポスター賞	荒居博之(生命環境科学研究科 生命共存科学専攻 一貫制博士3年)	福島武彦教授(生命環境系)
日本オペレーションズ・リサーチ学会平成23年度学生論文賞	松川恭明(システム情報工学研究科 社会システム・マネジメント専攻 博士後期1年)	吉瀬章子教授(システム情報系)
生体医工学会シンポジウム2011 ベストリサーチアワード	武富卓三(システム情報工学研究科 知能機能システム専攻 博士後期1年)	山海嘉之教授(システム情報系)
平成23年度日本環境共生学会(環境共生学術賞)著述賞	沖山充(生命環境科学研究科 国際地縁技術開発科学専攻 博士後期3年)	徳永澄憲教授(生命環境系)
第22回基礎有機化学討論会ポスター賞	趙男(数理物質科学研究科 化学専攻 博士前期2年)	市川淳士教授(数理物質系)
第20回地理情報システム学会学術研究発表大会優秀発表賞	長谷川大輔(システム情報工学研究科 リスク工学専攻 博士前期2年)	鈴木勉教授(システム情報系)
第120回講演会日本育種学会優秀発表賞	岡部佳弘(生命環境科学研究科 生物圏資源科学専攻 博士後期3年)	江面浩教授(生命環境系)
ACM SIGSPATIAL GIS 2011 Google Travel Grants for Female Students	水谷千亜紀(生命環境科学研究科 地球環境科学専攻 一貫制博士5年)	村山祐司教授(生命環境系)
10th International Symposium on Organic Reactions, Best Poster Award	高橋正樹(数理物質科学研究科 化学専攻 博士前期2年)	市川淳士教授(数理物質系)

※所属、職名、学年は受賞年時

本学基礎工学類卒業し、現在は、マンガ家としてご活躍の青木俊直さん(83年卒)に、学生時代のエピソードや本学学生へのメッセージなどを伺いました。



あお き とし なお 青木俊直さん

マンガ家

プロフィール

1960年 東京都生まれ
1983年 筑波大学第三学群基礎工学類卒業
1980年代後半～ テレビ映像・キャラクターデザインに携わる
2003年 マンガの創作活動を再開
2011年 京都精華大学マンガ学部 非常勤講師

— まず始めに、本学への進学理由と、学生時代に、特に印象に残っていることを教えてください。

筑波大学を選んだのは、自分の学力に見合う工学部があって、親元を離れて一人暮らしができたからです。印象に残っているのは、現代視覚文化研究会(「現視研」というサークルの活動と、1~2年生の頃、寮の友達とバカなことをやりながら楽しく過ごしていたことがほぼ全てですね。

— 「現視研」ではどのような活動をされていたのですか?

今の「現視研」は、いろいろ幅広くやっているようですが、僕らの頃は、マンガを描きたい人がほとんどでしたから、みんなでマンガ同人誌を作っていました。同人誌の即売会に出すために、かなり熱心に取組んでいましたよ。彼らとは今でも付き合いが続いていて、去年は、30年ぶりに

同人誌を作りました。

— 基礎工学類からマンガ家とは異色の経歴だと思いましたが、学生時代からマンガを描いていたのですか。

卒業後は、大手電機メーカーに就職したんですが、ずっと、今の自分がやっているような仕事がしたいと思っていて、4年で辞めました。でも、基礎工学類を選択してよかったと思っています。今は学歴を生かす仕事はしていませんけれど、物の見方であるとか、大学で学んだことが身になっていると感じますから。

— 退社後は、どのような仕事をされたのですか?

現視研の先輩が編集プロダクションに勤めていて、会社員の頃から時々仕事を頼まれ

ていたんで、辞めた後しばらくは、その先輩から仕事をもらっていました。その後は、テレビのアニメーション制作や、キャラクターデザイン、G-mode携帯ゲーム制作などの仕事を…。ものぐさなので、営業はあまりしないのですが、ありがたいことに、今まで絶え間なく仕事がありました。筑波大学のおかげだと思います。どの仕事にも、筑波大学出身の方や、学生時代に知り合った方が関わっていました。



— 本学で築いた人脈に支えられてきたと…。

そもそも、筑波大学に来なかったら、こういう仕事をしていなかったでしょう。総合大学なので、サークル活動や寮生活を通じて、いろんな学群の人たちと出会うことができ、人の関係が広がりました。それに、筑波大出身者には、結束力というか、不思議な連帯感があるんです。

— テレビのアニメーション制作などの仕事からマンガ家にシフトしたのはいつ頃ですか？

2003年に、マック版「コミックスタジオ」というマンガ原稿制作ソフトが発売されたのが、マンガ再開のきっかけでした。パソコンの画面を見ながら描いてみたら、「結構描けるじゃん」と、昔の虫が騒いで…。再開当初は、「マンガ家になる」というより、「趣味でマンガ同人誌を作る」という感じでした。まあ、あわよくば、という気持ちはありましたけどね。同人誌即売会を主催している、学生時代からの知り合いに誘われて、制作した同人誌を出品したら出版社から声がかかり、マンガ家として仕事をするようになりました。この即売会で知り合った人の紹介で、京都精華大学マンガ学部の講師もすることになったんです。本当に人生は、「人ありき」です。

— 京都精華大学マンガ学部は、日本で初めてできたマンガ学部として有名ですね。本学でも、未来構想大学講座「創造学群表現学類～OBOG指導によるクリエイティブ体験講座」で講義をしていただいています。

京都精華大学では、マンガ原稿制作ソフトの使い方の講義をしています。筑波大学の未来構想大学講座は体験講座なので、学生とやりとりしながら、楽しんでやっています。筑波大生は、「自由にやっていると」と抽象的な課題を投げかけても、「そうか、自由にやっていると」と具体化できちゃうところがいいですね。「自由にやる」って、簡単そうで難しいことなんです。発想が柔軟で、刺激を受けます。

— 今後やりたいと考えていることはありますか？

マンガの仕事が楽しいので、あと10年は、マンガを描いていきたいですね。実は今、僕の学生時代をベースにしたマンガを描くという企画が進行中なんです。携帯電話もパソコンもゲーム機も…僕の部屋にはテレビすらなかったのですが、そういうものがなくても、ばかばかしいことがいっぱいあって、けっこう楽しかったという話を描こうと考えています。

— それは楽しみです。「なのはなフラワーズ」も、アパートの住人たちの人間模様が描かれたマンガでした。

今は、アパートの隣人の顔さえ知らないなどと言いますが、僕は、そういうのが好きじゃない。こういう時代だからこそ、人が集まってわいわい暮らすのも楽しいよ、と伝えていきたいんです。

— 最後に、本学と、本学の学生に一言お願いします。

いろんな方向に向けて、「開かれた大学」を目指して欲しいですね。未来構想大学講座のような講座を、すべての学類でどんどんやって下さい。学生の方には、勉強でも、友達作りでも、サークル活動でもいいので、「あれだけはやったなあ」という実感が後に残るような大学生活を送って欲しいと思います。



代表作

*マンガ

「なのはなフラワーズ」(秀文社)
「くるみのき!」(@パンチ(新潮社)連載中)
「スリーピース」(シンカン(朝日新聞出版)連載中)など

*テレビ番組用アニメーション制作など

「ウゴウゴ・ルルガ」
「むしまるQ」
「おかあさんといっしょ」など

*キャラクターデザイン

G-mode携帯ゲーム
「ゆるゆる劇場」など



附属学校教育局
学校支援課
附属高等学校
富樫晶子さん



仕事の後の一杯。至福のひとつです。
私の場合は、もっぱら家飲み。
5人分の夕食の支度をしながら食材たちに囲まれて飲むビールは、1日の疲れた体と心が癒されます。次に、子どもたちの今日の出来事を肴に、家族に囲まれて飲む2本目のビールは、明日に向かって生きるエネルギー源となっています。そう考えると毎日笑顔で元気いっぱい働けるのは、ビールのおかげ？(笑) 将来の夢は、成人した子どもたちと杯を交わすことです。

今回は、附属学校教育局学校支援課(附属視覚特別支援学校)看護師の塚本依津子さんです。「附属視覚で大変お世話になりました。時に優しく、時に厳しく。とても頼りになるお姉様です」

数理物質科学等支援室
大島教子さん

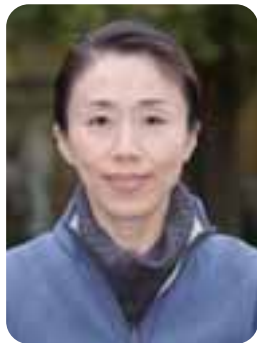


三年ほど前から庭の果実を活用して保存食品を作るようになりました。柚子、金柑、梅、福来みかん、ざくろ、姫リンゴなどで、中でも柚子は多くの実をつけ、捨てることなくいろいろな形で楽しめます。皮と身は柚子茶、柚子酒、ジャム、シロップ、ピール、砂糖漬け等にし、種は化粧水に利用できるのです。これからの寒い季節にお湯で割って飲む柚子茶は、体が温まりとてもおいしいですよ。また最近、庭に咲いた貝殻草を利用してのリース作りにはまっています。(写真) 案外かわいく仕上がったと一人満足していますが、どうでしょうか？

今回は、ビジネス科学等支援室の金子百合子さんです。「病歴と一緒に仕事をした後輩です。まじめに仕事に取り組み、よく気が付く大和撫子のような女性です」

リ シ ー イ ッ セ イ >>>

附属桐が丘特別支援学校
養護教諭
関塚奈保美さん



クラシックバレエを習い始めて数十年。下手の横好きで自己満足の稽古を続けています。余計なことを考えずに踊ることだけに没頭できる貴重な時間、明日への活力源になっています。
踊りは技術の高さや正確さだけでなく、踊り手から滲み出てくる魅力を楽しむのも一つです。上達しないのにこんなに長年続けていられるのも、宝塚ばりの容姿を持ち、真っ直ぐで力強く、優しい踊りをする先生の魅力に憑りつかれているせいです。踊ることは難しい、厳しい、辛いことの連続です……ただやめられません。

今回は、附属学校教育局学校支援課(附属久里浜特別支援学校)の高橋孝さんです。「以前に桐が丘でお世話になっておりました。気さくで仕事が早く、皆のアイドルです」

附属学校教育局
学校支援課
佐藤雅代さん



子供の頃から、車で家族旅行に出かけることが好きでした。
いまでも家族といっしょに自分の両親を連れて出かけることが多いです。最近は、車以外で旅行することも増えましたが、やはり自由がきく車のほうが私は好きです。この夏から東京勤務となりました。そんな私にとって電車通勤は不安でしたが、時がたてば慣れるというのは本当で、今はそれなりに通勤しています。ただ、身体の方は正直ですね。あれ？どうして？ひびきが？…みたいなことがありますね。

今回は、総務部職員課の大久保正二さんです。「採用された人事課の同じ係で。仕事と子育てに悩んでいた第一事務区時代にお世話になった大先輩です」

附属図書館
情報サービス課
原澤仁美さん

明治から平成まで、
スーパー長寿な祖母
101歳を久しぶりに
訪ねました。



大好きな唱歌『ふるさと』と一緒に歌ったり、私の子供の頃の話や祖父との馴初めなど昔話にも花が咲き、元気をもらったひと時でした。中でも曾祖父が寺の天井画や襖絵を描く絵師だったという話は興味深く、自分のルーツや家族の歴史をもっと知りたいという気持ちが湧いてきました。実家に伝わる昔の写真をひろげ、父母からそれに関わるエピソードや人物の名前を聞いてみると、徐々に家族年表が繋がって行きます。今年はまだ少し祖母の所に足を運んで、私版「ファミリー・ヒストリー」を形にできればと思っています。

今回は、附属学校教育局学校支援課の城野雅明さんです。
「共通のキーワードは『KEK』です。いくつもの顔を持つという噂ですが、そう言えば素顔の城野さんを見たことないかも！」

施設部
施設サービス課
板谷聡さん



現在の一番の楽しみは一歳になる孫とお風呂に入ることです。生まれたばかりの時は洗面台にお湯をはりママやおばあちゃんが入れていましたが、今はおじいちゃんと一緒に入ります。私が「お風呂に入ろう」と言うと笑顔のOKサイン、シャンプーをして頭からシャワーを浴びせても泣くことはありません。最近流行の育メンではなく育ジイ...までは行きませんが買い物に行けば孫の洋服やおもちゃを買ってしまいます。息子には甘やかし過ぎと怒られますがそんなことは無視。もう少し大きくなってから我慢を覚えさせるつもりです。

今回は、計算科学研究センターの倉持聡さんです。
「プライベートのキャンプで知り合ってから仲です。物静かでダンディーな方です」

T S U K U B A C O M M U N I C A T I O N

生命環境系
教授
和田洋さん

3年前に新居に移ったのを機に、薪ストーブを導入しました。使い始めた当初は、煙突から押し戻されてくる煙が部屋に充満し、夜明け前に煙警報器がけたたましい音をたてるなんてこともありました。そんな経験も笑い話にできるようになってからは、書きものをしながら火をおこして部屋を暖め、家族が起きてくるのを待つのが冬の日課です。リンゴの薪を燃やしたときの甘い香りは、寒い冬でも外に出て、煙突から出る煙をしばらく嗅いでいたくなるほどです。もうエアコンには戻れません。



今回は、企画室講師の岩本浩二さんです。
「日本生物学オリンピックつくば大会実行の心強いパートナーです」



附属学校教育局学校経理課
須賀信介さん



東博から転勤して3年になります。館ではフットサルチームを立ち上げました。若い男女とボールを追いかけて、「無理しないで〜!」の声にダイジョーVサイン。コミュニケーションで氣勢を上げ、チョイ悪オヤジギャグで恐れられています? 5月に韓国慶州に遠征し、韓国国博との交流試合ではキムチとマッコリ飲みながらのプレーでした。民泊して韓国の庶民的な生活に触れることができました。妻は中学教師を早期退職し、人生の楽園そのもので、カルチャー教室通い。蕎麦打ち、お弁当、晩酌のつまみ作りに精を出しています。感謝!

今回は、研究推進部研究企画課の藤田祐嗣さんです。
「パワフルサッカーで良きライバルでした。練習コートは墨田区総合体育館です。遊びに来てくださいね」

本学教職員と学生にアンケート調査を実施し、本学関係者の興味や関心のあることを紹介する「つくばNOW」。アンケート調査をお願いした際には、ぜひご協力をお願いいたします！

第2回 読書

しんと冷え込んだ寒～い夜は、お部屋でぬくぬく過ごすのが一番ですね！
こんな時にはゆっくり読書を、という方も多いのでは…？ということで、
第2回は、読書に関するアンケート調査をしました。

筑波大生は本を読まない！？

1か月に読む本の数：教職員も、学生も、全体的の中で、「1か月に1冊も本を読んでいない人」の割合が一番多く、教職員34%、学生43%でした。文化庁が実施した「国語に関する世論調査」(平成20年度)の20代は38%でしたので、**全国平均より本を読んでいない**という結果になりました。教職員は、全国平均よりやや高いものの、学生・教職員共、ごく一般的に「本離れ」が進んでいるといえるでしょう。「1か月に3冊以上本を読む」人は、教職員が39%、学生18%。教職員には、「月に10冊以上読む」読書家が4%もいるなど、「本好き」の人は、教職員の方が多そうです。

■ 雑誌やマンガは身近な存在

1か月に読む雑誌やマンガの数：雑誌・マンガを読む数では、一番割合が多いのは、「1か月に1～2冊読む」で、教職員37%、学生43%。「1か月に1冊も読んでいない人」の割合は、教職員18%、学生23%と低く、本に比べてずっと毎日の生活の1シーンに溶け込んでいるようです。そして、「1か月に10冊以上読む」学生が10%もいて、「本」とは逆に、「雑誌・マンガ」をととてもよく読む人は、学生の方が多という結果になりました。

教職員は、今後の電子書籍利用に積極的！

電子書籍に関して、「PC、携帯、その他端末で電子書籍を利用したことがある人」の割合が、学生は38%であるのに対し、教職員は18%と低いという結果は、みなさんの予想通りではないでしょうか？しかしながら、教職員のうち「電子書籍の利用に関心がない・知らないという人」の割合はわずか18%で、64%が「利用したことはないが関心がある」と回答していることに注目！「本は紙で読むもの！」と電子書籍を否定しているわけではなく、「読んでみたい」という、積極的な姿勢が感じられました。

■ オススメの本

「皆様にぜひ読んで欲しいオススメの本を教えてください」という質問に対して、マンガ、ライトノベルから、世界の古典文学、推理小説、歴史小説、エッセイ、学術書と、実にさまざまな本を紹介していただきました！

教職員からは、「のぼうの城」(和田竜)、「楽毅」(宮城谷昌光)、「漆の美のみのる国」(藤沢周平)などの歴史小説や、「ウエスト・ポイント流最強の指導力」(L.R.ドニーソン)や、「下流志向——学ばない子どもたち働かない若者たち」(内田樹)などの実用書が多く紹介されていました。

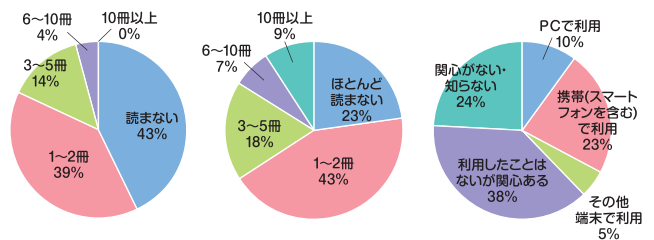
学生のオススメ本は、ファンタジー小説、ミステリー小説、ライトノベルが多いということと、恩田陸、伊坂幸太郎、有川浩、乙一の作品が多かったのが特徴的でした。また、学生からは、「戦争と平和」(トルストイ)、「レ・ミゼラブル」(ヴィクトル・ユゴー)、「春琴抄」(谷崎潤一郎)など、国内外の名作の名も挙げられていました。

教職員と学生で重複した作品は、「永遠の0」(百田尚樹)だけでしたが、著者でみると、伊坂幸太郎、有川浩、P.F.ドラッカーも両者から推薦されていました。

たくさんオススメしていただいた本の中から、今回は、複数の方からオススメがあった本と1か月の読書数が多い方からのオススメ本(本文中の作品を除く)を中心に紹介します。冬の夜のお供にぜひどうぞ。

読書アンケート～学生

- Q1. 1か月に何冊くらい本を読みますか？ (雑誌・漫画・電子書籍を除く)
Q2. 1か月に何冊くらい雑誌・漫画を読みますか？ (電子辞書を除く)
Q3. 電子書籍を利用したことがありますか？



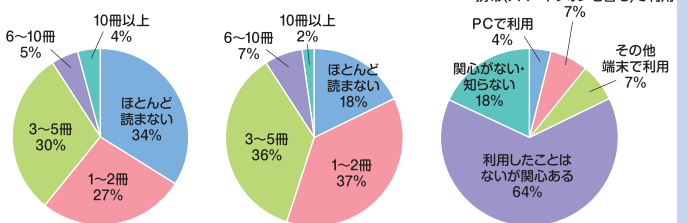
オススメの本

作品名	著者名	一言紹介
砂漠	伊坂幸太郎	登場人物が大学生の長編青春小説
夢をかなえるゾウ	水野 敬也	ファンタジー小説の形をとった自己啓発本
図書館戦争	有川浩	エンターテインメント小説
新参者	東野圭吾	推理小説
ロードムービー	辻村深月	短篇集
カッシアの物語	アリー・コンディ	アメリカのベストセラー・ファンタジー
99のなみだ	リンダブックス編集部	"泣ける"12篇の短編小説集
ドミノ	恩田陸	スピード感のあるパニックコメディ
1Q84	村上春樹	世界中で読まれているベストセラー。"近過去小説"
坂の上の雲	司馬遼太郎	歴史長編小説

□ 男性 □ 女性

読書アンケート～教職員

- Q1. 1か月に何冊くらい本を読みますか？ (雑誌・漫画・電子書籍を除く)
Q2. 1か月に何冊くらい雑誌・漫画を読みますか？ (電子辞書を除く)
Q3. 電子書籍を利用したことがありますか？



オススメの本

作品名	著者名	一言紹介
KYOKO	村上龍	著者が製作した映画の小説版
ローマ人の物語	塩野七生	イタリア在住の作家による歴史大作
たまたま地上にぼくは生まれた	中島義道	哲学者・中島氏の講演・対談集
がん 生と死の謎に挑む	立花隆	大反響を呼んだNHKスペシャルの単行本
丸かじりシリーズ	東海林さだお	人気長寿食べ物エッセイ
薔薇の木 桜の木 榎の木	江國 香織	9人の女性たちを描く"恋愛運動小説"
地のはてから	乃南アサ	北海道で生きた女性の一生を描いた長編小説
下町ロケット	池井戸 潤	男たちの意地とプライドを賭した戦いを描いた小説
サッカーの詩学と政治学	有元健・小笠原博毅編	イギリスなどの学者たちが記したサッカー文化研究論書
猫を抱いて象と泳ぐ	小川洋子	チェスの天才少年の数奇な人生を描いた小説

□ 男性 □ 女性

Tsukuba Supporters

本学を内外から応援(サポート)していただいている団体を紹介します。

[虹の会とは]春日プラザを拠点とし、外国人の支援と国際交流を目的とするボランティアグループです。

本学の国際交流コーナーと連携しながら、外国人留学生や外国人研究者と、その家族を支援していただいています。



イベント「お茶とお花にチャレンジ」



修了式後のパーティ



修了式での日本語スピーチ



日本語教室の授業風景

各界から表彰・受賞多数

30年を越す歴史を誇るパイオニア

虹の会は、本学の外国人留学生や外国人研究者とその家族が不慣れな生活や言葉で困っていることを知った、本学教員や研究者の夫人たちが中心となって1981年に発足しました。当時、外国人支援団体はほとんどなく、全国を見まわしてもパイオニア的な存在です。

自宅でのティーパーティからスタートし、生活用品確保のためのバザーや文化交流会の開催、日本語教室を開設するなど、活動の幅を広げ、外国人のための生活情報誌や、「6ヵ国語によるお産の言葉集」なども発行してきました。

こうした活動は、(社)日本善行会の全国表彰や茨城県功績賞他、数多くの賞を受けるなど、各方面から高く評価されています。

「日本語指導部」

「日本語個人指導部」

「文化交流部」の3部門で展開

現在、虹の会の会員数は46人で、日本語指導部、日本語個人指導部、文化交流部の3部門で活動しています。

日本語指導部が開催する日本語教室には、今までに、70ヵ国以上、3000人を越える外国

人が参加しました。3段階のレベル別クラスがあり、各クラス共1回2時間、週2回。2期制で、1期34回の費用は2000円(教材費)です。

授業では、市販の日本語教本を使って指導しますが、「日本での生活に早く馴染んでもらうのが第一ですから、生活の話題もたくさん入れて授業しています」と、日本語指導部代表の守屋知子さん。「納豆」などの実物を持ちこんだり、教材を手作りしたりして、楽しく役立つ授業を展開しています。

一方、小さい子どもがいるなどの理由で、日本語教室に参加できない人を対象に、スタッフが受講者の自宅で個人指導や、2~4人のグループ指導しているのが、日本語個人指導部です。

両部門の日本語指導者たちは、外国人生徒にとっての駆け込み寺的存在でもあり、役所や子どもの学校からの通知の意味がわからない、と相談されることは日常茶飯事。「スーパーで売っている、茶色い大きなゼリーみたいなものは何ですか?」(答えは味噌)といったことから、プライベートなことまで、貴重な相談相手になっています。

文化交流部では、異文化交流の集いを企画・開催。「日本の文化を楽しみながら伝える工夫をしています。前回は、「お花とお茶にチャレン

ジ」という催しをしました。日本語教室の生徒さんに、日本語で、母国の文化を紹介してもらう会なども開催しています(文化交流部代表宮本みち子さん)。

つくばでの楽しい思い出を作るために

いずれの部門も、「外国から来た人たちが、つくばは楽しかったという思い出を持って帰って欲しい」という想いはひとつ。

本学が、昨年から、春日プラザの一室を活動拠点に提供したことも、虹の会の活動の弾みとなったようで、会長の上田典子さんは、「筑波大学から、春日プラザの国際交流コーナーやボランティアサポートルームを、つくば市の外国人のためのコミュニティにしたいというお話をいただいていますので、今後、よりいっそう活発な活動をしていこうと考えています」と、力強く語っていただきました。

同会の活動について、より詳しく知りたい方は、下記を参照にしてください。

国際交流ボランティア 虹の会
<http://www.rainbowclub.sakura.ne.jp>

本学同窓会組織の茗溪会からの情報や話題などを読者の皆様へ紹介します。

[茗溪会とは] 社団法人茗溪会(西野虎之介理事長)は、筑波大学同窓会を母体とする公益法人で、1882年に設立されました。同会は、筑波大学およびその前身諸学校(東京教育大学、東京文理科大学、東京高等師範学校、東京農業教育専門学校、東京体育専門学校、図書館情報大学など)の卒業生により組織されており、現在の会員数約5万4000人を数え、その6割以上が筑波大学卒業生となっています。

「図書館学校」創設90周年記念で講演会

図書館情報学橋会(茗溪会支部)と筑波大学図書館情報メディア研究科は、筑波大学図書館情報メディア研究科および情報学群知識情報・図書館学類の前身学校である文部省図書館員教習所が大正10年に創設されてから90周年になることから、「図書館学校」創設90周年を記念し、二つの事業を開催しました。

10月3日～10日まで、図書館特別展「図書から情報メディアへ」を筑波大学春日キャンパス情報メディアユニオンで開催しました。また、10月9日には、作家の阿刀田高氏(昭36卒)と寺田光孝氏(筑波大名誉教授、昭46卒)を講師に招き記念講演会を開催しました。



講演する阿刀田高氏



茗溪会のつくば公開講座

茗溪会の主催する筑波地区での公開講座が、10月29日と11月12日の2回、筑波大学と筑波研修センターを会場として開催されました。

10月29日には、上松佐知子氏(筑波大学准教授・生命環境系)が「絶滅を生きのびた生物～化石から見た地球環境変遷」と題して、大学会館で講演しました。当日は、約30人の高校生を含む地域の方々が多数参加しました。化石と地層を用いて地球環境の変遷過程を解明する方法を解説、そのなかで、生物大量絶滅事件を紹介するなど、興味つきない内容でした。参加者からは、「あんな小さな化石から地球史について

考えていることに驚いた」「コノドントは、96%が死滅したにもかかわらず長期間生き延びた生物であることを知り、びっくりした」などの声がありました。

11月12日の講座は、「藤原教授の英語のはなし第4弾」として筑波研修センターで藤原保明氏(筑波大学名誉教授)の講演。「平安時代の英語は面白い」と題して、8世紀以降のアンゲロサクソン王国からノルマン征服に至る民族移動を背景に、古い時代の英語がどのように変遷したか、当時の正確な発音も交えながらのお話がありました。



藤原保明氏



上松佐知子氏

第10回を迎えた茗溪会顕彰

茗溪会顕彰として、11月25日、東京・茗溪会館で顕彰式と祝賀会を行いました。本年は、全国から6団体と個人5人が顕彰対象となりました。この事業は、地域社会で広く社会に貢献している青少年や一般社会人を顕彰するという茗溪会の公益事業の一環です。

筑波大学関係では、バドミントン部の地域の小中学生指導、筑波大学生による「学び場さくら塾」、体育学研究科木原洋一さんの神奈川での体操教室など、地域貢献活動が取り上げられました。

この日顕彰状を授与した茗溪会西野虎之介理事長は、「私どもの顕彰活動は、ごく日常的で継続的な社会貢献活動を対象にしているのも、社会的に意味のある働きかけになることを期待している」と述べました。

祝賀会での受賞者のスピーチでは、「子どもたちと遊んでいるだけで楽しいのですが、心が折れることもあります。この顕彰によって、がんばれと言っていたようにとても励みになります」などの言葉がありました。



筑波大学生による「学び場さくら塾」の風景

本学の父母会組織である紫峰会からの情報や話題などを読者の皆様へ紹介します。

【紫峰会とは】 紫峰会は、筑波大学生の課外活動などを支援するために1977年に設立された学生後援会です。主な事業は課外活動助成事業（援助金の支給など）、学生生活支援事業（緊急貸付金、コピーサービスなど）、広報・普及事業（紫峰会報の発行、UTcollectionの制作・販売など）です。学生の保護者、卒業生とそのご父母の方、教職員など約1万人が入会しています。このコーナーでは、紫峰会が行っている様々な活動を紹介していきます。

「かたちにしたい」を お手伝いします～UTservice～

UTservice(ユージーサービス)は、サークルや研究室などから個別に相談を受けて制作を行う受託制作サービスです。グッズ開発(UTcollection)から得られた物作りのノウハウ、特に小ロット制作の物づくりネットワークを活かし、学生の「かたちにしたい」という思いを実現できるよう、相談に乗っています。手軽な値段で質の高い印刷物などを作成することで、各団体のイメージアップや活動の活性化にも貢献するというのも大きなねらいです。紫峰会の予算上は、経費や人件費を含めて収支上独立採算が取れるように進めなければならないため、ネットワークとノウハウをフル活用してコスト調整に努めています。

平成11年に筑波大学の校章が統一され、UTcollectionを本格展開することになりました。グッズ開発の企画・調査の際、紫峰会にゆかりの深いサークルの学生にどんなグッズが欲しいかという聞き取り調査をしました。すると、自分のサークルの印刷物やグッズなどをデザインして

欲しいという要望が寄せられたため、UTコレクションの一部門として事業化し、10年間で延べ約800件の利用を頂きました。

ものづくりの 駆け込み寺

サークルの中にはコンサートやイベントのために定期的にポスター等の制作を行っている団体が数多くあります。団体に芸術系の学生が所属していた時には、その人に制作をお願いしていたが、その学生が卒業してしまい頼める人がいなくなって困ったという相談も紫峰会には寄せられます。UTserviceは、こういったケースに対応する「ものづくりの駆け込み寺」としての側面もあり、課外活動支援の一環としても重要な機能であると考えています。また、医学生や大学院生からの相談を受けた時に、学生の都合に合わせて実習後の時間帯に打合せを



設定するなど、柔軟に対応できるのも、学内に事務所がある紫峰会ならではのサービスです。

紫峰会では、実費によるコピー・軽印刷のセルフサービスも行っています。ところが、印刷部数が多くなった場合には、オフセット印刷の方がコストが安くなる場合がありますので、窓口では、印刷のコスト・品質・納期などに応じて総合的なアドバイスも行っています。

これからも、学生の「ワガママ」をひとつでも多く「かたち」に出来るよう頑張ります。

後援事業成果報告

第80回日本学生陸上競技対校選手権大会報告

9月9日～11日にかけて、天皇賜盃第80回日本学生陸上競技対校選手権大会が、熊本県KKWINGにて開催されました。この大会で筑波大学陸上競技部は、男子が6位(1位1種目、入賞10種目)、女子が3年連続21回目の総合優勝(1位3種目、入賞21種目)を果たすことができました。

第80回の記念大会ということで、例年実施されてきた国立競技場ではなく熊本での開催となり、多くの大学が、部員全員での熊本入りを断念する中、筑波大学は全員での熊本行きを部員総会で決定しました。200名近い部員が九州に移動するというので、

経費の面を含めすべてが大がかりで苦勞の連続でした。この事業に対して紫峰会から特別援助金90万円を頂くことができ、自己負担の軽減につながり、大変感謝しております。

慣れない環境に戸惑うこともありましたが、大会中は、試合に出ない部員たちも、大会の補助員活動やトレーナー活動の指揮を執り、大会運営にも貢献するなど、筑波大学陸上部としての総合力を発揮できたのではないかと考えています。今後は、この貴重な経験を生かし、競技力や組織力の更なる向上を目指して練習やその他の活動に励んでいきたいと思ひます。(陸上競技部主事 橋本峻)



上：部員から胴上げされる宮下部長
左下：女子三段跳び優勝の前田和香選手(体育3年)
右下：男子800m優勝の中村康宏選手(体育3年)

Media Appearances 本学関係の主な新聞掲載・テレビ放送一覧(10月~12月)

● 新聞記事一覧

	記事	掲載本学関係者	掲載紙(掲載日)
1	本学のサークル「花火研究会」[総合学習サークル 賢謙楽学]は、附属病院に入院中の子ども達に夢と希望を与えるため、雙峰祭の後夜祭会場で、子どもたちが描いた絵をイメージした「ゆめ花火」を打ち上げる	大滝優(医学類6年) 穂戸田勇一(応用理工学類3年)	茨城(9.30) 読売(10.3) 朝日(10.5/10.8) 毎日(10.7)
2	本学は、10月1日より、全教員約1700人の所属組織を、人文社会学系、ビジネスサイエンス系、数理物理学系、生命環境系、システム情報系、人間系、体育系、芸術系、医学医療系、図書館情報メディア系の10の「系」に再編成	本学	毎日(10.1) 茨城(10.1)
3	▽こだま:本学の芸術の授業、アート・デザインプロデュース演習(ADP)で、アートを病院に「街」をつくる芸術活動を実施	蓮見孝教授(芸術系)「アスパラガス」(芸術学生チーム) 岩田祐佳梨(人間総合科学研究科 博士前期2年)	日本経済(10.4)
4	▽2012ロンドンへ:W杯優勝以降、ドイツで一目置かれるようになったというサッカー女子日本代表FW安藤梢(ドイツ・デュイスブルク)。W杯で日本に敗れたことで、五輪への道を断たれたドイツのみで、五輪の舞台での活躍を誓う	安藤梢(人間総合科学研究科 博士後期3年 ドイツ・デュイスブルク)	東京(10.5)
5	東日本大震災の被災者を支援する本学生の有志団体「Tsukuba For 3.11」(中川遼代表)が、雙峰祭で、被災地での半年間の取り組みを紹介	中川遼太(生命環境科学研究科 博士前期2年) 水落裕樹(生物資源学類3年) 辻村夏穂(社会学類4年) Tsukuba For 3.11(被災支援団体)	毎日(10.10) 茨城(10.9)
6	東日本大震災による津波で工場が流れた水産加工会社の缶詰に、本学の学生がオリジナルのラベルをデザインし、雙峰祭の一環である「芸術祭」で販売。売上は全額義援金に	早川寛人(芸術専門学群2年) 水本隆朗(芸術専門学群2年)	常陽(10.9)
7	▽くろーずあっぷ:自転車で行った日本縦断0円旅行を成し遂げた袴田大輔さん	袴田大輔(国際総合学類4年)	産経(10.10)
8	柔道・全日本学生体重別選手権で、男子66kg級の小倉武蔵3度目の優勝	小倉武蔵(体育専門学群4年)	朝日(10.9) 毎日(10.9) 産経(10.9) サンスポ(10.9)
9	本学と物質・材料研究機構、産業技術総合研究所の3者は、ナノテクノロジー(超微細技術)を活用した環境・エネルギー分野で会員組織を立ち上げ、共同研究する企業の募集を開始	本学	茨城(10.18) 産経(10.28)
10	ラグビー関東大学リーグで、本学が21-7で早大に快勝。早大に勝利したのは、33年ぶり、2度目。同一シーズンで早慶撃破は初	ラグビー部 古川拓生監督 中川克信(体育専門学群4年) 松下彰吾(同2年) 彦坂匡克(同3年) 竹中祥(同1年) 水上彰太(同1年)	茨城(10.24) スポニチ(10.24) サンスポ(10.24) 朝日(10.24) 毎日(10.24) 読売(10.24) 日本経済(10.24)
11	第59回全日本学生剣道優勝大会で、本学が9年ぶり10度目の優勝	剣道部 鏑山隆弘監督(体育系) 村上雷多(体育専門学群1年)	毎日(10.24) 茨城(10.24)
12	バスケットボール関東大学女子リーグ 3年ぶり16度目の優勝	女子バスケットボール部	茨城(10.24)
13	来日中のクリスティアン・ヴルフ独大統領が本学を訪問。山田信博学長が、大統領に名誉博士号を贈呈した後、大統領が、日独の技術協力などをテーマに特別講演を行った。サッカー女子日本代表安藤梢選手(ドイツ・デュイスブルク)も同行して来学	山田信博学長 安藤梢(人間総合科学研究科 博士後期3年 ドイツ・デュイスブルク) 大学会館ホール 会館食堂	毎日(10.26) 朝日(10.26) 読売(10.26) 産経(10.26) 東京(10.26) 茨城(10.26) 常陽(10.26)
14	本学の三谷純准教授らは、手描き入力で、誰でも簡単に自分好みの木製製品を作るソフトウェアを開発	三谷純准教授(システム情報系)	日経産業(10.27)
15	政府の2011年度第3次補正予算案の閣議決定を受け、本学は東日本大震災後の復旧状況を発表。施設の被害総額は、約46億円で、3次補正までに計31億円が措置される予定	体育・芸術図書館 総合体育館 附属病院 大型実験装置「ペレトロンタンデム加速器」	読売(10.28) 茨城(10.28) 常陽(10.28) 日刊工業(11.1)
16	第30回全日本女子学生剣道優勝大会で、本学が、2年ぶり8回目の優勝を果たした。本学は、ここ4年間で3度の優勝と、黄金期を迎えている	有田祐二講師(体育系) 三苦冴(体育専門学群4年)	毎日(11.7) 茨城(11.7)
17	柔道の世界ジュニア選手権女子48kg級で、遠藤宏美が優勝	遠藤宏美(体育専門学群1年)	毎日(11.4) 日本経済(11.4)
18	10年1月に、本学、高エネ研、原子力機構、三菱重工などが、産官学のプロジェクトチームを設立。がん細胞を中性子ビームで狙い撃ちする次世代がん治療の臨床研究拠点「いばらき中性子最先端医療研究センター(仮称)」の整備を東海村で進めている	松村明教授(医学医療系) 熊田博明准教授(医学医療系)	茨城(11.6)
19	本大発ベンチャー企業、サイバーデザインが、重い放射線防護服を身につけても楽に作業できる、原子力災害用ロボットスーツを開発	サイバーデザイン 山海嘉之教授(システム情報系)	朝日(11.8) 毎日(11.8) 読売(11.8) 日本経済(11.8) 産経(11.8) 日経産業(11.8) 東京(11.9) 茨城(11.9)
20	▽ひとときらり:エアロビックの全日本選手権で、史上初となる大会3連覇を達成した諏訪部和也さん	諏訪部和也(人間総合科学研究科 博士前期2年)	茨城(11.10)
21	本学と東北大、仙台市は共同で、石油を作る藻類の実用化に向けた研究に関する連携協定を締結。東日本大震災の被災地から新たな資源循環システムの創出を目指す	渡邊信教授(生命環境系)	日刊工業(11.11)
22	本学、理化学研究所、富士通は、世界最速のスーパーコンピューター「京」が、米国計算機協会の「ゴードン・ベル」賞の最高性能賞を受賞したと発表	本学	産経(11.19) 毎日(11.19) 夕日本経済(11.19) 夕東京(11.19) 茨城(11.19) 日刊工業(11.21) 日経産業(11.21) サンスポ(11.19)
23	▽教育ルネサンス 学校と震災:本学は、福島県伊達市の仮設住宅入居者を対象に、ITを利用した健康支援プロジェクトを実施。いわき市では、仮設住宅が集まる地域でコミュニティ形成を支援	久野謙也教授(体育系) 村尾修准教授(システム情報系) 吉澤裕世(人間総合科学研究科 博士課程2年) 保科祥(体育専門学群4年) 星知世(社会学類4年)	読売(11.24)
24	本学が、東日本大震災の復興支援で自治体などと連携するための新組織「復興・再生支援ネットワーク」を発足	森本浩一副学長	茨城(11.25) 日本経済(11.25) 毎日(11.26) 常陽(11.26) 産経(12.4)
25	東日本大震災の津波で壊れたみこしを再建	藤原直也(生命環境科学研究科 博士前期2年)	毎日(11.25) 26
26	取手市は、本学アイソトープ総合センター所長の松本宏教授の助言を受けて、除染検証作業を実施	松本宏教授(生命環境系)	毎日(12.7) 産経(12.7)
27	本学大毛利健治准教授らは、立体構造のナノワイヤ型トランジスタが、従来構造のものに比べて、雑音強度を抑制できることを発見	大毛利健治准教授(数理物質系)	日刊工業(12.8)
28	文部科学省の今年度博士課程教育リーディングプログラムに、本学が申請した「ヒューマンバイオロジー学位プログラム」が、採択された	本学	常陽(12.8)
29	本学を中心とする開発チームが、がん細胞を狙い撃ち、破壊する「BNCT(中性子捕捉療法)のための装置を小型化する開発に乗り出した	松村明教授(医学医療系) 熊田博明准教授(医学医療系)	朝日(12.15)

● テレビ放送一覧

	内容	出演本学関係者	放送局・番組(放送日)
1	新たな境地を開拓する「挑戦者たち」の姿を追う	山田信博学長他	テレビ東京 時代の挑戦者たち~常識を超える~(12.10)

[January]

- 4日(水) 仕事始め 学長年頭挨拶
- 10日(火) 理療科教員養成施設一般入試(一次試験)
- 12日(木) 出願受付「私費/編入(社)」(~18)
- 14日(土) 大学入試センター試験(~15)
- 21日(土) 茗溪・筑波グランドフェスティバル
- 23日(月) 出願受付「前期/後期」(~2/1)
- 28日(土) 第2回筑波大学研究成果発表フォーラム2012
- 31日(火) 理療科教員養成施設一般入試(二次試験)(~2/1)



[March]

- 1日(木) 附属駒場高等学校卒業式
- 7日(水) 合格発表「前期/私費/編入(社)」
- 9日(金) 附属坂戸高等学校卒業式
- 12日(月) 入学試験「後期」
- 15日(木) 附属中学校卒業式
附属視覚特別支援学校卒業式
附属聴覚特別支援学校卒業式
附属大塚特別支援学校卒業式
- 16日(金) 附属高等学校卒業式
附属桐が丘特別支援学校卒業式
附属久里浜特別支援学校卒業式
- 19日(月) 国際シンポジウム「Frontiers in Behavioral Brain Science」(~20)
- 20日(火) 合格発表「後期」
- 22日(木) 附属駒場中学校卒業式
- 23日(金) 卒業式 大学院学位記授与式
附属小学校卒業式
- 24日(土) 平成22年度 卒業生・修了生記念式典
- 28日(水) 春の進学説明会(~30)

[February]

- 9日(木) 附属久里浜特別支援学校実践研究協議会(~10)
- 10日(金) 第2回日本・北アフリカ学長会議(~11)
- 16日(木) 附属小学校初等教育研修会(~17)
附属桐が丘特別支援学校研究協議会(~17)
- 17日(金) 附属大塚特別支援学校研究協議会
- 18日(土) 附属視覚特別支援学校研究協議会(~19)
- 23日(木) 附属坂戸高等学校総合学科研究大会(~24)
- 24日(金) 附属聴覚特別支援学校聴覚障害早期教育公開研修会
- 25日(土) 入学試験「前期/私費/編入(社)」(~26)
附属学校春期研修会
附属学校教育局研究発表会
- 28日(火) BEST FACULTY MEMBER表彰式
- 29日(水) 第3学期授業終了





筑波大学
University of Tsukuba